

観 光 情 報 誌
し み ず 知 的 探 索 BOOK

「 清 水 区 歴 史 散 歩 」

J R を 利 用 し た 半 日 程 度 の 身 近 な 歴 史 探 訪

健脚家のための脇道（間道）・

バイコロジー利用の道 併記

目 次

	まえがき	・・・	3
	はじめに 1・2	・・・	4
1 A	J R 富士川駅周辺	・・・	7
2 B	J R 富士川駅から富士川鉄橋	・・・	9
3	富士川（岩淵）より蒲原へ	・・・	10
4	由 比 宿	・・・	13
5	J R 由比駅より薩埵峠登り口倉沢	・・・	17
6	薩埵山（峠）を越えるための いくつかの道	・・・	20
7 A	内 洞・外洞コース	・・・	21
7 B	薩埵山、古道コース（鎌倉街道）	・・・	23
7 C	興津川を上流へ、井上コース	・・・	23
8	17番目の宿「興津」	・・・	25
9	身延往還路（甲州道）	・・・	26
10	「中宿」より「興津宿」	・・・	27
11	清見瀧・清見寺	・・・	33
12	横砂・袖師	・・・	35
13	庵原川の橋の上「袖師」	・・・	37
14	西久保から辻	・・・	39
15	江尻宿	・・・	41
16	草 薙	・・・	44
17	蘆原（いほはら）の国（13の続き）	・・・	45
18	北街道（鎌倉街道）	・・・	46
19	小 島 の続き	・・・	47
20	江 尻	・・・	49
21	三 保	・・・	51
22	久能山	・・・	53
23	久能道	・・・	53

24	バイコロジー（自転車コース）	・・・55
1	由比・興津間（山下海岸）	
2	興津の町なか	
3	臨海道（マリンロード）	
4	52号線・身延往還路	
5	蘆原（庵原）	
6	飯田・高部（北街道）	
7	バイパス走行	
8	清水駅東口から三保へ	
9	祈！交通安全	

特別編

その1	富士市以東へ	・・・61
その2	府中・駿府 旧静岡市内	・・・63
その3	富士川、古谿荘	・・・67
その4	清見寺にまつわる話	・・・68
その5	桜えび漁の話・夜曳	・・・70
その6-1	安倍川橋	・・・73
6-2	宇津ノ谷	・・・74
25	まとめにかえて	・・・75
	見学先・立ち寄り先抜粋	・・・77
	SVG・各ガイドの会連絡先	・・・85
	友誼団体・責任者連絡先	・・・86

まえがき

SVG（清水区観光ボランティアガイドの会）では、すでに県内外を含め各界より発行された情報誌やマップを手にした数多くの「歴史散歩」を楽しんでおられるウォーカーの方々をお迎えしております。そして、「とても人が良い」「親切」「やさしい」「ていねい」などとの言葉をいただいております。

しかし、地元を愛し観光ガイドの活動を志している私たちとしては、その言葉に甘えることなく、例え情報が重複することがあっても、地元にも埋もれている情報を、改めてこの「清水区歴史散歩」と題した冊子にまとめ「歴史散歩」を志す方々へご紹介したいとの願いを持って、それぞれの街や施設でみなさんをお迎えさせていただき、日々ガイドに務めてゆく所存でおります。

この冊子は、このような願いを込めて、JRの各駅停車を利用してそれぞれの町を単位に 半日程度の徒歩で散策できるコースを主にまとめてみました。

さらには、健脚家の方々には、脇道（間道）や山道。あるいは、ふと思いついてマイカーを利用し常々気にしていたところへの立ち寄りのためのポイントなども、各々のコースに従い書き出してみました。

なかには、とても出掛けることができる程の脚力が残っていない方、杖を離すことができない方、車イスの生活をされている方々も、この書を読み返しながら、地図を片手に、あるいはパソコンや携帯電話のナビゲーターを見ながら、昔歩いたコースや立寄ったことのある名所旧跡などを思い出していただくことも大いに結構と考え、1冊の書物としてとりまとめを試みてみました。

その土地や地域の人との出会い。自然や風景・風土・土地柄、さらにはその土地の恵み・伝承との出会い。加えて建物の形状やその土地の地形・歴史・文化等などを読みとっていただくことを期待しております。

とはいえ、けっしてその記載内容が絶対正しいとは申しません。今回、この冊子を手にした諸氏により、私どもがとりまとめ記載していることの可否さらには欠落しているところのご指導ご指摘を仰ぎ、その内容の一層の充実を計り再編集もしたいと考えております。積極的なご指導ご指摘を希望いたします。

冒頭にあたり、私どもの願いを申し上げるとともに、各位のご理解とご指導・ご教示を改めてお願い申し上げます。

はじめに 1

かつて1961年（昭和36年）旧清水市は、周辺の庵原郡・有度郡・安倍郡に所属していた村や町と合併。そして今般2004年（平成16年）駿府（すんぷ）の町「静岡市」は、清水市と残る庵原郡の3町と、若干の時間差がありましたが、合併により広い範囲の政令指定都市となりました。

この過程には紆余曲折がありましたが、最も大きな話題となったのは、旧清水側は、江尻・清水の名前を引っ込め「駿河」の名前を推したのですが、旧静岡側は譲らず、最終的には、合併の1年前にやっと「静岡」の名前と「葵区」・「駿河区」・「清水区」が決まったのでした。

いやもっと昔の話。そもそも市制が敷かれた大正13年（1924年）2月11日当時、現在の町名でいえば、清水町・江尻町・入江町・辻町・不二見町そして三保村により、人口4万人。市名は「清水市」と命名されましたが、江尻・辻の地域から反対の声が起こり、そこから何年かの月日を経て「清水」の誕生という経過がありました。

今回の2004年の合併でも、旧庵原郡3町（富士川・蒲原・由比）では、時間差が生じましたが、なんとか現在の姿に納まった次第です。

・・・いや、まだくすぶっている問題もあるようですが・・・。

これらの経緯については、改めてまとめることが必要ではありますが、結果、興津と由比の間の「薩埵峠」という昔ながらの峠道。東は、流れの激しい「富士川」や途中の「由比川」「興津川」「庵原川」そして清水の町中には、静岡へと続く「巴川」。さらに西の端には、水量の多い「安倍川」を抱え、その川を越えて「鞠子」（丸子）（まりこ）の宿を過ぎ、岡部・志太（藤枝市）へ向かうための「宇津ノ谷峠」と連なります。

この地域の「東海道」には、六つの宿場町とそれぞれの峠や川岸には、いくつかの「間の宿」（あいのしゅく）があり、全国的にも稀にみる特徴のある地域であり、そこには数多くの歴史が刻まれていることを承知しております。

この冊子は、現清水区のその東「富士川」の西岸から、西は、旧静岡市と清水市の境界「草薙」（くさなぎ）ないしは「曲金」（まがりかね）の地域。「古道」を辿ると、西奈・瀬名。JRの駅で申せば「富士」・「富士川」・「新蒲原」・「蒲原」・「由比」・「興津」・「清水」・「草薙」・一部「東静岡」の地域を主にして取りまとめてみました。

加えて、この東海道沿線から多少離れた地域、例えば、興津では、身延路（身延往還路）を上がって「小島」（おじま）の地域。あるいは、清水と興津の間の東名高速道ICや新東名のジャンクションの集中している「庵原」。清水では「三保」の地域。草薙との境にある「有度山」の麓の地域や、通称「北街道」

と呼んでいる東名高速道の側道の地域などもこの範囲としてまとめてみました。

改めて、読者諸氏におかれましては、ご高覧を仰ぎ、より内容の充実したものとなるようご指導・ご教示をお願い申し上げ、その内容が一層充実されますことを願っております。

**SVG (清水区観光ボランティア・ガイドの会) への
ご連絡・お問い合わせ先**

事 務 所

〒424-0943 静岡市清水区港町2丁目1-1 キララシティ2F
清水市民活動センター気付
清水区観光ボランティアガイドの会 (略称SVG)

電話・FAX 054-351-0211
携帯電話 080-1586-6456
Eメール svg20160912@yahoo.co.jp

なお、SVGの事務所は、常駐していることはありませんので、留守のため対応できないこともあります。ご了承ください。
多少の日数の余裕を持って、郵便あるいはFAX・Eメールにて、緊急の場合には携帯電話までご連絡ください。

はじめに 2

「東海道」といえば、江戸「日本橋」を起点に、京「三条大橋」までの国道1号線（ルート1）といわれています。

・・・いや、西の御所から見れば、京三条大橋から江戸日本橋までという方もおられることと思いますが、今回は、東から西へ向かう方向を原則とさせていただきます。・・・

さらには、弥次さん喜多さんでおなじみの「東海道五十三次」。

この表現が一般的ではありますが、この言葉にクレームをつける方もおられるかもしれません。

・・・三条大橋・伏見より京街道・大坂街道をさらに西へ向かって、枚方・守口・大坂、京橋・高麗橋までの「東海道五十七次」を唱える説は承知しております。・・・

ところで、そもそもこの「次」という言葉について、すでにご承知のこととは思いますが、その要点についてふれてみます。

それは、徳川家康が、関が原の戦いの翌年慶長6年（1601年）、東海道に「宿駅」を制定。宿場には「継ぎ立て」の区間に53回の「継ぎ替え」を定めました。

ここから「五十三継ぎ」（次ぎ）と呼ばれるようになったといわれていることが定説のようです。

東海道全域についてはさておき、今回私どもがとりまとめた地域は、その中間地域、静岡市の清水区は、15番目の宿「蒲原」（かんばら）・16番目の「由比」（ゆい）・17番目の「興津」（おきつ）そして18番目の「江尻」（えじり）となります。加えて、行政区は富士市となりましたが、富士川の西岸かつては庵原郡富士川町、間の宿（あいのしゅく）「岩淵」（いわぶち）をも含めてスタートしております。

それでは、ここからは各町、かつての宿場町を中心に順次書き連ねてみます。

この文章は、各宿場町とその主な見学先・目印になる箇所を連ねていますが、かなり雑駁な文章になっておりますことをご理解ください。それぞれの立ち寄り先などの歴史は、是非現地へ足を運んでいただき、ご確認いただくことをお願い申し上げます。

1 出発いたします。まず A. 「JR富士川駅」の地域です。

「日本三大急流」のひとつともいわれる「富士川」に鉄橋が架けられたのは、大正13年（1924年）のことです。徳川幕府により、街道が整備されながらも、およそ300年間という長い期間、向う岸へは船により「渡船」をしており、その西岸の渡船場が、間の宿「岩淵」（いわぶち）と呼ばれていました。現在は「JR富士川駅」となります。

そして車社会となった今では、東名高速道の富士川サービスエリア・道の駅「富士川楽座」が設けられ、その賑わいをみせています。

・・・下道からも富士川の鉄橋をさらに上流へ進んで「富士川楽座」への入場は可能ですヨ。（県道10号線）

・・・私は、この富士川の西岸から見る「富士山」が最も好きなところ、一日中眺めていても飽きないところです。

富士山のすぐ右手には、箱根の山。そして、さらに右手の伊豆の連山から昇る日の出の朝焼け、そして、夕陽が西に傾く時、冠雪の季節には、その白い雪がみごとに色着く「赤富士」が見えるからです。・・・

この富士川を挟む東海道

富士川の東岸、現在の富士市は、間の宿「本市場」（ほんいちば）（もといちば）と呼ばれており、宿場町としては、その東側の「吉原」となります。さらにつけ加えるならば、この14番目の「吉原宿」も、かつては現在のJR吉原駅・・・「鈴川」と呼んでいた・・・田子の浦港の海岸線を通行していたのですが、1639年（寛永16年）・1680年（延宝8年）の津波、さらには、1707年（宝永4年）宝永山の噴火などにより、3度の所替えがされ、内陸部へと宿場町は移ってゆくのです。

・・・当時の呼称「元吉原」・「中吉原」そして「新吉原」は今も残っています。

そして、間の宿「本市場」の南の地域、現在のJR富士駅あるいは新幹線の新富士駅の地域は、三大急流の「富士川」の三角州の地帯でしたので、大雨や地震などのたびに、その地形が大きく変動したといわれています。今も、この地域の町名に「〇〇島」と呼ばれているところがあります。

このように富士川の東岸は、何回となく富士川の氾濫に苦しめられていましたが、中里村の古郡（ふるごおり）孫太夫重高の親子三代が、50年余の難工事を行い、延宝2年（1674年）「雁堤」（かりがねつつみ）を完成。新田開発に大きく貢献したといわれています。・・・現在は身延線の西側、国道の北側

に「雁公園」(かりがねこうえん)となっており、その形状は、雁が羽根を広げたようで、ここからは、雄大な富士山の景観が楽しめます。

そして、その富士川の西岸側は、この富士川を甲斐の国・甲州方面との「水運」のルートとして大いに力を発揮していました。その開発に力を注いだのは、江戸時代の初期、慶長12年(1607年)「角倉了以」(すみのくら、りょうい)により富士川を開削・航行可能としたのです。これにより、岩淵の街には「御廻米蔵屋敷」が建ち並び最盛期には800隻もの高瀬舟が往き来したのです。

ところで、なぜこれほどまでに「富士川」のことに拘るのかつけ加えさせていただきますその理由をご理解ください。

この富士川の水運は、甲州(山梨県)信州(長野県)からの米や木材を下ろし、伊豆で採取された「天草」(てんぐさ)を諏訪湖へ運んで「寒天」の製造したり 格言にある「敵に塩を贈る」・・・清水区の沿岸(由比・蒲原)で作られた「塩」の運搬に使用する等 その輸送路として「高瀬舟」により多くの荷物が運ばれていたのです。

川を上る時は、芝川・稲子・十島(とおしま)あたりの急流では、川の両岸に道を通し、ロープで舟を引き上げるといふ姿の絵も残されています。陸路で馬を利用しても一頭で米4俵が限界でしたが、この富士川の水運を利用し、大量の輸送が可能になったのです。そして、ここ現在の富士川から陸路や小廻船に積み替えて 江尻・清水湊へ運び、さらに江戸や大坂へは、大型の輸送船「菱垣廻船」や「樽廻船」に積み替えられ運ばれていったのです。

・・・「大坂」今は大阪ですが、この時代は「大坂」でした。・・・

清水の「港橋」の横に「甲州廻米置場跡」が残っておりますし、この水運の人たちの休憩する施設が、間の宿「岩淵」になるのです。

間の宿

江戸時代には、五十三の宿場が置かれていましたが、宿間の距離が長いときやここ「岩淵」(富士川)のように、その必要性が生じた場合に設けられ、本陣・小休本陣がありました。

河岸段丘

富士・吉原と同様、寛永・延宝の津波や宝永4年(1707年)宝永山の噴火による地震のため、岩淵宿は壊滅、現在の位置に所替えをしました。さらに文政5年(1822年)ころの度重なる富士川の氾濫。さらには、安政の地震などにより、何度となくその流路を変えた「岩淵の宿」は、固い岩盤を削って、今は解り辛くなりましたが「河岸段丘」を形成。角倉了以の「紀功碑」の近く、旧身延道の入り口付近には「舟山町」の名前も残っています。

2 B. 「JR富士川駅から富士川の鉄橋まで」の道

東海道（現在は、国道1号線が変更されて、県道396となっています。）はJRと並行している道になりますが、その途中、中学校のほぼ向かいに広大な敷地のお屋敷があります。

明治の末期の時代、宮内大臣を務めた「田中光顕」伯爵の別荘「古谿荘」（こけいそう）の跡です。・・・末尾「特別編」に詳細は記してあります。

同氏は、事情があって、この別荘を出版会社講談社の社長野間氏に売却されたので、現在は「野間文化財団」の所有ですから一部の人たちの間では「野間別荘」と呼ぶ人もいます。・・・国の指定重要文化財となっています。

富士川の鉄橋を渡らずに、そのまま西側の岸を上流に向かいますと、東名高速道のサービスエリアの上流、大きな体育館の所在する所に「木場」（きば）と呼ばれる地域があります。木材の運搬・取引に関わっていた商家のことを「木屋」（きや）と呼んでいました。きっとその集積場だったのでは？

その上流が「松野」の地域、そして富士川の「蓬来橋」を越え、ゴルフ場の下が大宮（現富士宮）浅間神社の前にすぐ到着します。（国道76号線）

ところで、現在この富士川の町を通ると意外な地形に驚かれる人が多いと聞いています。

それは、「野間別荘」の向かい「第一中学校」の敷地です。東海道沿いから敷地全体を見渡してみてください。

国道から一段下がったところに玄関と校舎。そしてグラウンド。その一番奥が富士川の堤防になります。 エッ??? 校地全体が河川敷？

さらに玄関に入る前に、橋が架かって一段下がっています。その橋のたもとには、石垣（石積み）。この敷地からイメージできること。

富士川の「水運」の荷物の積み降ろし場（岸壁）と想像できませんか？

「岩瀨水門」も見られます。・・・果たして、真実は・・・???

そしてあとひとつは、現在のJRあるいは旧国道1号（現396号）の通行している土地の高さに対して、西向きに進むその右手とは、平均数メートルの差異があることです。

もちろん旧東海道は、この高い地形になりますが、富士川の急流により削り取られた「断層崖」が、何箇所かかなりはっきりと確認できる町筋ではないでしょうか。高いところに移った東海道には、「小休本陣、常盤邸」・「新豊院」・立派な「一里塚」や「最古の古民家」を移築した指定有形文化財の「歴史民俗資料館」等なども立寄ることができます。

3 富士川（岩淵）より蒲原へ

富士川の駅を起点に富士川の橋まで。そこから上の道へ登って、ぐるり1周の散策で2～3時間のコースになります。

ところでこの富士川は、それ以前は、蒲原・由比の3町で、庵原郡となっていました。今回の合併により、富士川の東岸の富士市と合併したのですが10年を越えている現在、住民の日常生活に奇怪な状況が見られます。

それは、市民税など税制・保険制度などは、富士市の管轄下にありながら、郵便番号は、蒲原・由比と同じ421-3×××。斎場は、富士川の河川敷の蒲原にある斎場を共用。電化製品では、もうこのような心配はなくなりましたが、旧富士市は、東京電力側の50サイクルに対し、中部電力の60サイクルの使用です。上・下水道も同様です。

けっして日常生活での不便さはないかもしれませんが、このような差異の解決は必要ないのでしょうか。

以上、清水区ではありませんが、共通の地域との思いで冒頭触れました。

3 富士川（岩淵）より蒲原へ

富士川第一小学校の前を通り、富士川郵便局の少し手前を右折すると、間の宿「岩淵」（いわぶち）と別れ、山越えの「**新坂**」（にいさか）・・・現在では新幹線を越え、東名高速道の側道周辺・・・を通過して、蒲原の「**諏訪**」へ下り江戸日本橋から38里の一里塚跡を通り、東木戸跡から**15番目の宿「蒲原**」に入ります。

街道の途中からの目印は、小高い山の上には、蒲原病院・日本軽金属の研究所。そして南面には、発電所の送水管等が最もわかり易い目標になると思います。

山越えを避ける道は、富士川郵便局前を直進、横断歩道橋のある交差点が、JR富士川駅前。この交差点を右折、眼下のいくつかの工場の建ち並ぶ広い景色を左手に見ながら進むと「蒲原・諏訪」になり、「新坂」の山越えの道と合流します。JRは、**新蒲原駅**となります。

この蒲原宿も、かつては新蒲原駅の南側周辺・日本軽金属蒲原工場の敷地あたりだったといわれていますが、前述の吉原・富士川の所替えと同じころ、一段高い現在の地域にその宿を移動しています。

JR新蒲原駅の駅前では、木造の「さくら海老漁」の舟が出迎えてくれます。蒲原宿への道筋は、駅西のJRのガード下を潜り、国道へ出て東へ数分歩くと「諏訪の郵便局」の近く。そこから、さらに上へあがる道を通して「東木戸」

へ出るコースが最も解りやすいかもしれません。

もうひとつのコースは、駅前をそのまま東へ線路沿いに進み、警報機の踏切を渡って「諏訪」へ出ることも可能です。日本軽金属の発電用の鉄管路の周辺になります。

まず最初、「諏訪神社」の常夜燈は、江戸時代のものといわれています。その先、鉄管路を過ぎると、まず初めに3階建てのめずらしいお蔵のある家が目につくと思います。富士川で触れた「木屋」です。

この木屋の3階建てのお蔵のあるところが、**渡邊家「木屋江戸資料館」**です。事前に、電話連絡（054-385-3441）をして申し込みをすれば立ち入り・見学は可能です。

そして、その少し手前になりますが、山側の「**龍雲寺**」、創建は、室町時代の初期、今川家初期の菩提寺といわれており、このお寺には「**文福茶釜**」が保存されています。

「たぬき」でおなじみの文福茶釜ではありません。支那の鋳物師「文福」により鋳造された物といわれています。見学には、事前の話し合いが必要です。

そして、ここから西向きに進みますと、見付・問屋場などを含め古い家並みが残されており、「古の町」を残している「歴史街道」は、全国的にも価値高い町筋になり、お休み処「和泉屋」や「五十嵐邸跡」等などいくつかの所では、みなさんのお立ち寄り・見学もできる施設もあります。

かつての狼煙場（のろしば）だったといわれ、今は桜の名所となっている「**御殿山**」へは、八坂神社からおおよそ20分位登ってください。

「**蒲原城跡**」は、東名高速道のさらに上になります。

「**蒲原城**」・・・山城。室町時代は、今川一族。戦国時代は、北条家に治められていました。北条早雲の孫、新三郎は、武田信玄・勝頼らと対峙。蒲原城主となりますが、1569年（永禄12年）武田軍の猛攻に遭い戦死。三島の祐泉寺に埋葬されましたが、ここ蒲原の東木戸一里塚の近くに、その墓標柱が建てられています。

古い町筋も終り、西木戸への坂を下る右手の「**和歌宮神社**」に気がつかれましたか？・・・この神社の祭神は、なんと「**山部赤人**」なのです。ということは、あの有名な「田子の浦ゆ、打ち出でてみれば・・・」の歌はここ蒲原で詠われたのでしょうか？

ところで、今少しこの江戸風情の残る「**歴史街道**」といわれる蒲原宿で気をつけてみていただきたいところがあります。

そのひとつは、この街道筋の右手（山側）には、いくつものお寺や神社があることです。なぜでしょう？

もうひとつは、新蒲原駅前の南向き、スーパーイオン・蒲原東小学校・日本軽

3 富士川（岩淵）より蒲原へ

金属の工場などが目に入りますが、実はこの一帯は、奈良・鎌倉時代の「宿駅」のあったところといわれています。富士・吉原・富士川などと同様、寛永・宝永の時代の天津波により「所替え」がされ、「高台移転」により現在の街道筋になるのです。ですから現在の街道筋は「東海道」と呼んでいますが、それ以前の「宿駅」の存在していた時代の道筋を「鎌倉街道」と呼んでいるのです。

では、その町筋は、どこでしょうか？

新蒲原の駅のガードを潜って、旧国道（現396）へ進まないで、JRに平行して西へ進みます。家並みの続く狭い道です。

5分位進むと「堀川」と呼んでいる、かなり深い石積みのしっかりした川沿いに出合います。実はこの「堀川」は「船溜」といわれており、「運河の跡」ともあるいは「湊の跡」ともいわれています。

えええっ？

富士川を下ってきた「高瀬舟」の荷を、ここから「清水湊」へ運ぶための「小廻船」に積み替えをしたところになり、多くの屋敷が建ち並んでいたことから地元の人たちは、この一帯を「古屋敷」とも呼んでいるのです。

もうひとつ、今度は新蒲原駅の左手（東側）正面、日本軽金属の工場一帯です。JRの踏切を渡らずに、今少し工場沿いに進みますと、「蒲原中学校」の正門の前に着きます。

なに？なに？ 学校の正門の前に「松」や「碑」が建てられています。

「浄瑠璃姫」に関する伝説はいくつかありますが、ここは、義経を追ってきた姫が「吹上の浜」で疲れ果てて死んだという話がありますが、そのことを現しているところです。

蒲原という町には、「歴史街道」だけではなく、まだまだこのような昔の話が埋もれている「歴史の宝庫の町」といえるものと思います。

新蒲原駅を基点にぐるり1周の散策で2～3時間程度。昼食は、国道沿いの「芳川」や「やましち」でいかがですか。

さあ～、古い町筋と別れ、宿場の西端、高台から下へ下り「西木戸」で、かつての国道へ戻り、新田（しんでん）・「小金」（こがね）などの街道筋を西に向かって進みます。・・・道幅が狭いので車にご注意！

バイパスが通行されるまでは、この狭い道を大きなトラックが、夜・昼なく走行していました。・・・ぞっとしませんか？

小金（こがね）！すごい名前ですネ。白銀（しろがね）もあります。その昔、金や銀が産出したのでその名がついたとか？

JR蒲原駅の少し手前、右手の郵便局の奥に、かなり威厳のある建物が目に

つきませんか？富士川町のところで触れた「田中光顕」が新たに建てた「青山荘」(せいざんそう)です。現在は、日本軽金属により管理されていますので立ち入り・見学には事前の手続きが必要ですが、周辺を見学するだけなら自由に見られます。外周を見るだけでもその立派さを想像することはできるのではないのでしょうか。・・・末尾特別編に詳細を記してあります。・・・

4 由比宿

蒲原駅前を通り過ぎ、「堰沢」を過ぎると16番目の宿「由比」の「常助郷」(じょうすけごう)「神沢」(かんざわ)に入ります。東名高速道の下を過ぎ、神沢川を越えると家が建ち並んでいます。地元の人はこの地域を「松原」と呼んでいます。

神沢川の西側「神沢川酒造場」では、現在も、誉富士(ほまれふじ)・正雪(しょうせつ)の銘柄のお酒を醸造しています。

高架下の三叉路、右側が「新道」。左が「古の道」東海道です。

ここから**39番目の「一里塚」の先から「由比宿」**に入ります。

ちなみに、東海道は、概ね2里毎に一里塚を設けられていたと言われますが由比より手前の「一里塚」は、蒲原諏訪地区の「東木戸」「木屋」の少し東側。その前が「富士川」でした。この先40番目の一里塚は「西倉沢」(望嶽亭)そして41番目は「興津中宿」42番目は江尻の「辻」になります。この「一里塚」は、信長・秀吉のころから、36町を一里とし、一里ごとに道の両側に五間四方の「塚」を築き、その脇に「榎」(えのき)を植えたといわれています。

1里とは、現在の換算をすると、3927.27m(3.927Km)、

1町は60間、36町が1里、1間は1.8181818mとなります。

「富士川」の一里塚が最もその雰囲気を出していると思います。

由比宿は、由比氏の分家筋にあたり、家康より居屋敷と本陣職を与えられ代々「岩邊郷右衛門」を名乗り、昭和まで「駒引き伝馬朱印状」と「掟書き」を所持していました。明治には、由比氏から岩邊氏に改名しましたが、本陣職と問屋職を構えた宿場町でした。

平成3年(1991年)この敷地に、「本陣公園」を整備、離れ座敷「御幸亭」などを復元、さらに2005年には、浮世絵師、歌川広重の作品を中心に収集・展示する世界初の「広重美術館」も造られました。周辺にはかなり古を感じさせる建物が現存。この本陣公園の正面から由比川の河口付近までの一帯には、蒲原同様、由比正雪の生家とされる「正雪紺屋」・明治の郵便局舎をはじめ古い

町筋が見られます。

それぞれの家には現在も居住している方々がおられますので、全てのお宅に立ち入ることはできませんが、外観からでもその歴史を感じさせます。

また、足元、河口の向こう岸に「行き止まりの道」がみえますか？この道こそ「東海道」の跡です。

徳川幕府は、この由比川に橋を架けることを認めておりませんでした。明治8年（1875年）2月、入山の望月幸平氏により、私財を投じて架け橋の落成を見ることになり「玉鉾橋」と命名。当時としては、無賃橋として有名になりました。この功に対して、親交のあった「山岡鉄舟」が揮毫した顕彰碑が由比新道に見られます。

その後コンクリートの橋が、昭和8年（1933年）7月開通。木橋の玉鉾橋は取り壊され、「由比川橋」と名を変えて現在に至っているのです。

またこの河口から、西の海岸線の方向に目を向けると、つぎの行程「**薩埵峠**」が、観音様の寝姿のように見えませんか？

ところで、なにげなく「**薩埵**」（さった）と使いましたが、古い書き物では、「佐田」「佐多」と表記されているものがあります。

「サ」（狭）「タ」（処）・・・狭い処、あるいは「サ」（先）「タ」（処）・・・、先端を示し、愛媛県や鹿児島県に「佐多岬」といって急な崖から海に落ちるような景観のところがあります。

ではここ当地の「**薩埵山**」「**薩埵峠**」の「**薩埵**」（さった）の語源は、何なのでしょう？

それは平安末期、この海岸から「**薩埵地藏菩薩**」が引き揚げられ、**磐城山（岩木山）**の山頂にその地藏を祀ったことから、人々は「**薩埵地藏**」が祀られている山を「**薩埵山**」と呼ぶようになり、その先端海岸への崖を「**薩埵峠**」と呼ぶようになったと言われています。

・・・信じるかどうかはあなた次第ですが、なにかロマンを感じませんか？

ここで街道筋のことから離れ「由比」の地形の歴史について触れてみます。

東西の街道筋から脇へ少し離れます。この「由比宿」のすぐ西側に「由比川」が流れていますが、この「由比川」を上ってみます。

その最初は「由比中学校」です。学校の裏手には、かつての石垣の跡と思えるような「石積み」が残っています。しかし、残念ながら学校の敷地になりまますから、勝手に立ち入ることはご遠慮ください。

もう少し上ります。新幹線を越えた先の「**林香寺**」というお寺には、徳川家

康が立ち寄った時、山椒の風味のするお茶でもてなしたところ大好評だったという話が伝えられています。

そしてこの由比川は「暴れ川」としても有名でした。かつては、石垣や庭石にするような大石が流れ落ちてきたといわれています。この地域の人の苗字に「石切山」（いしきりやま）というお宅がありますが、なにかご縁があるように思えますネ。

さらにこの由比川沿いを上ると、大宮（現在の富士宮）へ通じる県道76号線の山道になります。その昔、海岸線を通らない旅人やあるいは道路事情で通れない時は、この道を上り、西山寺・阿僧（あそう）を通過して「入山」（いりやま）から「鍵穴」（かぎあな）。そして峠越えをして、前述の富士川町の上流、北松野を経由して富士川を渡り、その向う岸の富士宮（昔は、大宮と呼んでいた）浅間神社へ通じる道だったのです。現在も県道として残っていますが、かなりハンドル捌きに難航する道です。もしチャレンジしようとする人は充分下調べをしてからにしてください。

歩いてこの峠越えをする人には、いろいろな読み方に苦勞する地名が多く、一寸興味の感じられる道になるかもしれません。

由比町の施行は、明治22年（1889年）の市町村制により、現在の大字11宿村が合併して発足したのですが、さらに遡ると、なんと「縄文時代」の中期から後期とみられる「縄文土器」が、この由比川の両岸から発見されています。

その代表的なものとしては、浜石岳への登り口、新幹線がちょっとトンネルを抜け出る、川の西側の地域「阿僧」（あそう）の「阿僧神社」の境内を中心としている「阿僧遺跡」からは住居跡。その対面、川の左岸（東岸）の「本光寺」の駐車場には、横穴式石室「室ヶ谷古墳群」等などがみつかっています。

但し不可思議なこと。次の時代の「弥生時代」をうかがわせる遺跡は発見されていません。何故でしょうか？

「弥生時代」といえば、水田が造られ水耕栽培が営まれ集落が栄えた時代といわれていますが、ここ由比の土地では、水田を造ることはかなり困難。縄文時代といえば、狩猟を中心とした生活が連想されますが、その狩猟に適した地域ではなかったのでしょうか。

「入山」（いりやま）の地域の「北小学校」の手前を左に進むと「桜野」（さくらの）になりますが、このルートの周囲の山は「烽火場」（のろしば）だったといわれています。峠や山頂で「烽」をリレーのようにつないでゆけば立派な通信網が想像できませんか？

「フォッサマグナ」の大断層沿いに陸路が発達。由比のいくつかの遺跡や発掘された出土品から、それらを物語る埋蔵物もみつけれられています。

由比（ゆい）・・・このようなことを感じさせる歴史を、改めて調べなおしてみたいと考えましたが、いかがでしょう？

改めて**街道筋**に戻ります。

この由比川を渡って西へ。JR由比駅までのおよそ2.5Km。道幅の狭いかつての東海道を進みます。

途中、**町屋原**（まちやはら）（地元の人は「まちやばら」ともいいます。）の地域には、進行方向右手には、「**豊積神社**」（とよづみじんじゃ）という歴史ある神社や「**地持院**」や「**桃源寺**」という歴史あるお寺もあります。また、古い昔ながらの町筋の建物には「せがい造り」や「下り懸魚（けぎょ）」が見られます。

「**町屋原**」・・・物々交換の市（いち）の開かれた場所を「原」といい、その店が建ち並んで「町屋」という説と、峠の入り口「イリ」とその集落「マチ」という説とを聞くことができます。

「**豊積神社**」・・・延喜式内神社。社伝によると、創建は白鳳年間（670年～800年）当時、豊積社と称する社があった。そして延暦16年（797年）坂上田村麿が、蝦夷（えぞ）征伐の途中、例幣使が戦勝祈願のために立ち寄り、豊積浅間神社の社号を賜ったとの記述があります。

富士山信仰の立場からみれば、富士山山頂から南西の方角を見下ろすと富士宮の浅間大宮本宮が「一の宮」大社。豊積神社が「二の宮」。そして三保の御穂神社・久佐奈岐（くさなぎ）神社が「三の宮」という位置関係を見ることができます。

「**桃源寺**」・・・境内の鎮守堂は、今川義元が勧進したと伝えられており、また山門脇には、手と手を取り合っているかわいい「道祖神」が置かれています。また天然記念物となっている「大銀杏」（いちょう）と、歴史を感じさせるお寺です。

「**地持院**」・・・臨済宗の禅宗寺院。地蔵菩薩を本尊としており、本堂は、まさに地蔵菩薩の世界を味わうことができるお寺です。

もうひとつ、**阿僧**に「**法城山、常円寺**」というお寺がありますが、このお寺の扁額が、朝鮮通信使によって揮毫された物ということが、朝鮮通信使の研究者により確認されました。同氏によれば、その扁額の裏面には漢詩が書かれているようですが、板の補修のため判読が困難とのこと。きっと貴重なことが記録されているのではないかとのことでした。

いささか時代が交錯してしまいましたが、これらの事柄から考えてみると、古代大和の時代の「道」は、小舟で海岸沿いを通行する「海の道」と、それらを結ぶ「陸の道」により交通したといわれていますが、由比は、その中継地ともいわれています。「フォッサマグナ」の大断層沿いに陸路が発達。由比のいくつかの遺跡から発掘された出土品や歴史ある神社・寺院から、それらを物語る歴史をうかがい知る地域の町「由比」でした。

さらに続いて、街道筋の散策行程の話が続けます。

「さくら海老」漁の水揚げで有名な「由比漁港」は、その少し西側「今宿」の左手の海側、JRを越えバイパスの先になります。

・・・漁は、4月～6月、10月～12月の期間に限られていますから、取れたての生のさくら海老や生しらすの堪能を目的とする場合は、この期間で漁のあった日のみとなります。今は、冷凍技術も優れていますから多少の前後は、それほど風味は変わりませんけれどネ。

「桜えび」を召し上がる方。漁協の奥の方にある「浜のかきあげや」はいかがですか？もし漁協がダメだったら、通り沿いでは、パノラマテラス「海の庭」や、上の新道沿いの「開花亭」なども良いと思います。

最後に、由比の語源に触れてみます。それは『結』（ゆい）です。

「結う」「交わる」「睦あう」・・・心の感じあえる町ではありませんか？

5 JR由比駅より薩埵峠登り口 倉沢

大きなさくら海老のアーチが迎えてくれます。

ここ由比駅からさらに西へ進むためには、駅前から2～3分坂を上ったところの歩道橋を渡って「寺尾」の集落に入ります。道幅はかなり狭くなり、マイカーの通行は極めて困難です。というより、ここからが薩埵峠の登り口になりますから、是非歩いて「薩埵峠」を目指してほしいところです。

最初に目につくところは、寺尾地区です。過去に何回か「山崩れ・地滑り」のあったところで、現在もその山崩れのための測量や対策が続けられ、「地滑り防災センター」は、今も休まずその防災の調査を続けています。

今もその心配がされていますが、進行方向右手の山が大きく削り取られており、この集落の家は、かなり新しい建物になりますネ。

地滑りの記録として、古く「安政の大地震」では、3人が生き埋めになったという記録が残されていますが、現代になってからの記録としては、昭和16

年（1941年）7月の集中豪雨による土石流では、人家2棟倒壊、死者6名、負傷者10数名。しかし、戦時下のため治山は十分になされませんでした。

昭和23年（1948年）7月、アイオン台風が襲来。国道・国鉄を7時間余止めたことにより「すべり止め工事」は着手されました。

昭和25年（1950年）6月、大雨により寺尾沢に亀裂が発生。一応の予防工事の完成をみるところとなりました。

ところが、その後に致命的な地滑りが続きました。

昭和36年（1961年）3月14日から15日の夜半に、再び土砂がすべり出し、民家の30m～50m近くにまで迫ってきました。

その復旧がある程度終わった昭和49年（1974年）7月7日～8日には、旧静岡市丸子から東部の千代田地区・清水市内・北街道沿線を襲った通称「七夕豪雨」という大雨の時、546ミリという異常豪雨は、民家全壊7戸、半壊32戸、国道は23日間通行止め。国鉄は7日間不通。東名高速道も、薩埵トンネル出口が崩落。さらにそれに加えて、8日午後12時05分地鳴りとともに、土石が国道1号線の下り車線（海側）の民家を3m近く埋没させてしまったのです。

東日本と西日本を二分する、静岡・糸魚川構造線（フォッサマグナ）が起こしたものと云われています。

もちろん全てが解決されたわけではありませんので、今現在も「地滑り防災センター」により その測量と調査は続けられているのです。

その最も被害の大きかった「寺尾」地区から、街道散策の話に戻します。

寺尾、名主の館「小池邸」を過ぎ、次の集落「間の宿」（あいしゆく）「東倉沢」「西倉沢」と続きます。

「鞍佐里神社」という神社に気がつかれましたか？・・・なんと読む？

「東倉沢」の「くらさわ屋」の屋号のお店にお気づきですか？

ここでは名物の「くらさわの鯰」（あじ）を口にすることができます。

「くらさわの鯰」という魚は、大海を泳ぎ回らずにこの海岸線で群れをつくっているというめずらしい鯰です。・・・飛び込み不可。要事前予約・お問合せを忘れずに！（T e l 0 5 4 - 3 7 5 - 2 4 5 4）

次が「西倉沢」・・・「柏屋」・「望嶽亭藤屋」の前を進みます。

いずれも「立て場」（宿の中間にあった茶店）のイメージのお店になります。

「望嶽亭」の立ち入り・見学は、事前に予約お問合せをしてください。貴重なお話が聞けます。

『1868（慶応4年）静岡（駿府）の伝馬町の「松崎源兵衛」宅で、勝海舟の命により、幕臣山岡鉄舟が、西郷との会談に向かっていたと

ころ官軍に追われ、ここ望嶽亭に逃げ込んだ。主は、隠し階段から舟で江尻宿まで逃がし、清水の次郎長に身柄を託して、無事その任を果たすことで江戸での戦いを回避。15代徳川慶喜の処分、無血開城へとつなげた。

その後、慶喜は、1868年（明治元年）水戸から駿府へ移り、翌明治2年 現在「浮月楼」として残っている代官屋敷に住むようになった。さらにその後1887年（明治20年）西草深に新邸を建設転居した。』

・・・当時の「ピストル」が展示されています。・・・

海岸沿いR1バイパスから、これらの集落への道は、東倉沢・西倉沢に、警報機のあるJR踏切がそれぞれありますが、バイパスの脇すれすれになりますから、警報機待ちの停車をする際にはくれぐれも気をつけてください。

街道筋は、このあたりからはだんだん人家がなくなり道幅も狭まくなり、すれ違いもたいへんになります。農道ですから、地元の農業の人の車を優先して通行してください。

季節になると大きな「由比ビワ」を見ることもできます。

・・・手に触れることは絶対にしないでください。果実が傷んで、商品価値がなくなってしまう。この枇杷にも、言い伝えがあります。・・・

それよりも、ここでちょっと立ち止まって！

今登ってきた道を振り返ってみてください。由比漁港・蒲原の海岸線、そして霊峰富士の山の絶景ポイント！

さあ～、あと少し。駐車場で小休止します。エッ？富士山が見えない！

富士山は、恥ずかしがり屋なので隠れてしまったのかな？

地元の人でも、年間平均すると100日程度しか富士山を仰ぎ見ることはありません。もちろん朝はきれいに見えていても、昼過ぎになると隠れてしまうことが多いです。もしもきれいな富士山を見ることができたなら、それは「ラッキー！」です。雪の冠雪した「富士山」を楽しもうとするには、毎年平均すると11月中旬から5月の連休（G・W）まで位が良いと思います。

* 自転車（バイコロジー）愛好家の方々へ！ *

バイパスは自転車走行禁止です。海側、堤防の側道に「自転車専用道」があります。由比駅方面から登ってきた人！薩埵峠へは、この先の駐車場までです。左手方向の展望所へは、自転車を置いて歩いて往復してください。そのまま興

津川の方面へ向かう場合は、右手方向の道を進むことになります。そのコースは、次の6・7の項を参考にしてください。

・・・かなり厳しい坂になります。ブレーキなどの点検をお忘れなく！・・・

6 薩埵山（峠）を越えるためのいくつかの道

あちらこちらとなりますので、次の7—A・B・Cとして順次触れてみます。

- ・ この駐車場から、進行方向西向き右手方向の道は、「薩埵古道・鎌倉街道」といわれている道です。
 - ・・・今は道が舗装され、その面影があまりありませんが、右手の小高い山が「薩埵山」（さつたやま）または「岩城山」（岩木山）（いわきやま）。
- ・ 「駒の爪跡」・・・石碑にしてありますが見つかりましたか？
- ・ この「薩埵山」その昔の呼称「岩木山」は古戦場。

ここは、かつての東西勢力の重要戦略地。そのいくつかを列挙します。

そのひとつは、建武2年（1335年）後醍醐天皇による建武政権が往き詰まった時、京都にいた足利尊氏は、弟直義と合流して、鎌倉の奪還をしたものの、後醍醐天皇に征夷大將軍に任じられず、新田義貞謀伐を名目に、天皇への謀反を明らかにした。しかし後年、直義と尊氏は、兄弟対立を起こし、ここ「薩埵山」を決戦の場として展開。尊氏は、地元の豪族等とともに直義を撃破。鎌倉を平定した。

あとひとつは、今川義元が、桶狭間で討ち死にした後、武田勢の駿府への侵攻を食い止めようと、北条氏と今川氏は、武田軍を「薩埵峠」で挟撃しようとした。その時、武田氏への裏切りにより、氏真は駿府を退去。武田氏は、駿府を占拠したものの、北条氏の援軍により薩埵峠の東側が押さえられたため、武田氏は、甲斐へ引き揚げることとなった。

・・・このような話が伝えられています。・・・

「薩埵峠」の展望所へは、「東海道メガロポリス」の歩行者道として整備された左手の道を進んでください。足を滑らせたならそのまま海へ墜落。要注意！歩行者のみ通行可能。繰り返しになりますが、自転車や自動車の人は、駐車場から歩いて通行して元へ戻るようにしてください。

そして、何度も振り返りながらその絶景を楽しんで進むと、一番高い展望台に到着。眼下には、東名高速道がトンネルから海岸線に出る景色。

東正面には、「霊峰富士の山」。その右手には、「箱根の峠」。さらに南東へと続く「伊豆の連山」。そして、進行方向西向きには、「三保の松原」。

海は「桜えび」でピンク色？・・・ウソ！そんな馬鹿な。

・・・お天気に恵まれれば、絶景のポイントとなります。・・・

ここで、ちょっとクイズで一休み！

振り返ってみると、それまで山側を通過していた東名道は、蒲原と由比の境界でR1・鉄道を交差し、由比の町では、海岸線を通行していましたネ。そして、ここ薩埵峠の下でトンネルとなって、再びJRと交差して興津へと続きます。言い換えると、この由比の町だけ東名道は「海岸線」を通過していることとなりますネ。・・・何故でしょうか？

富士山を仰ぎ見るための「絶景ポイント」を想定したからなのでしょうが？

・・・正解は、峠の入り口、寺尾地区の「防災センター」で

判明します。・・・

由比の方面から

車や自転車で登ってきた人

・・・ここでUターン。駐車場まで戻ってください！

ウォーカーの人　・・・さあ～！改めて、そのまま進行します！

ここでカメラをしまつてさらに西へ。階段をゆっくり下ると墓地の中に入ります。雨の日は滑りますから要注意！えっ！お墓の中を通過しても良いのですか？・・・構いません。そのまま墓地の中を進んでください。

その先、降りた所にちょっと広い場所。トイレもありますから小休止しましょう。ここには駐車場もあります。

興津方面からマイカーで入ってきて、「薩埵峠の眺望」を楽しもうとする人
ここへ車を置いて 墓地を抜け 階段を登り、展望所へ行くことは可能です。

7-A 峠の階段を下り、お墓を通り抜けて、この広場から道は、左・右 二手に分かれます。

薩埵峠の「上道」「中道」「下道」といわれた道のご案内になります。

振り返ってみると、今歩いて来た展望所までの道やお墓の中を通り抜ける道には、なにか不自然な感じがしますネ。当然のことです。その昔の峠越えの道は安全性・東名高速道の工事・東海道メガロポリスなどにより、かなり変えられていることをご理解ください。

正面の大きな建物「きよみの里」・・・老人介護施設・・・の手前を**右手**へ。広い道を曲がり、ゆっくり下ると「**内洞**」(うちぼら)。この集落を抜け、興津川の音が聞こえるあたりの「**瑞泉寺**」の正面を通ると川沿いの道になります。川を下るようにそのまま下ってください。JRの鉄橋が正面に見えます。鉄橋のすぐ手前、自治会館の前に、かつての「川越えの料金」が大きな看板に記されています。そして、鉄橋の橋桁をくぐる時、頭の上を見上げると、まるで自分の上を電車が通過してゆくような感覚になります。明治22年、東海道線が開通した当時の赤いレンガが積み重ねられている所もみられます。

数行前の7-Aの冒頭にあるように、左右二手の分かれ道に戻ります。

墓地を通り抜け、トイレのあったところからもうひとつの道があります。正面大きな建物「きよみの里」を**左手**に曲がり、かなり狭い道になりますが、うっそうとした木々に覆われた坂道や階段を下ってください。

・・・くれぐれも足を滑らせないように！・・・

JRの電車の音が聞こえましたか？その線路のすぐ手前「**白髭神社**」・「**海岸寺**」の前を通ります。警報機を守ってJRの踏み切りを渡るとバイパスになります。右折します。「**外洞**」(そとぼら)と呼ばれている集落です。

この辺り、かつて波が打ち寄せている江戸時代の浮世絵の景色に想像できませんか？

・・・そのまま狭い道を西向き、興津川の方へ進んでください。

バイパスへは絶対に出ないこと！・・・

一節前の「内洞」コースとは、興津川橋(かつては、浦安橋とも呼ばれていた)の橋の東岸「岩城人形屋」さんの前で合流します。

ここから興津川の鉄橋を渡って「川越え」をします。

それにしても、この橋かなり年期の入った橋ですよネ。

この「浦安橋」は、1875年(明治8年)に木造の橋が架けられましたが、その後何回となく大水に流され通行が途絶えることが繰り返されましたが、1932年(昭和7年)興津地区の国道拡幅工事に伴い、現在のコンクリートの橋が架けられ「興津川橋」と呼ばれるようになりました。その当時の橋です。もちろんそれまでは木橋でした。

橋のすぐ手前、反対側の南車線沿いの海辺に何軒かの家がありますが、このあたりのことを、昔から「**浜**」(はま)と呼んでいて、小型の舟で興津川の河口や山下海岸あたりで漁をする家の人たちです。昭和7年のコンクリートの橋に架け替えられるまでは、通行を遮断され、興津川を渡る舟が必要な時には、この舟を「渡し船」として貸し出した時代もあったとのことでした。波打ち際のかなり危険な場所に家を構え生活していたということは、その危険を充分承知

しながらも、生活のため、旅人のために舟を維持・管理しながらの生活していたのでしょネ。

7-B さらに前の節、6の分離点「峠」の駐車場・休憩所から

「薩埵古道・鎌倉街道」の峠越えをする人のコースに戻ります。

このコースを車で通行する人もいるかもしれませんが、狭くて危険極まりない道です。地元の人でも車では通りたくないといわれている、あまりお勧めしたくない道です。

自転車の人。しつこいかもかもしれませんが、くれぐれもギアチェンジ・ブレーキを点検してから走行してください。

最高地点「駒の爪跡」などは確認不可能ですが、苔の生した石畳の道を想像してみると、なにか古の旅人の気持ちになりませんか？

坂を下ると、現代の世界「東名高速道の側道」になります。

右手の古めかしいお寺が目に入りましたか？**真言宗「東勝院」**です。

今も、薩埵地蔵を守り続けているお寺さんです。

7-C 興津川を上流に向かいます。

側道を**興津川の方へ進む**と 昔の「浦安橋」のたもと「青島神社」のあたりで東名道を潜るところに出ます。ここで**川の流れる方向（下流方向）**へ下ると、すぐ前の7-Aに記した内洞コースと合流します。そのまま、河口の興津川橋（浦安橋）まで進んでください。

逆に**上流の方へ進む**と、東名道のガードより上が「井上」という集落です。古地図では、この集落こそ「薩埵村」の呼称がついていました。

「**霊泉寺**」・・・**穴山梅雪の菩提寺**です。

梅雪の死去についてはいくつかの説がありますが、ここに間違いなく眠っているはずですよ。

川の向う岸には「横山城址」ものぞめます。「井上」の上流が「**承元寺**」。

大きく川が蛇行したさらに上流が「**小島**」（おじま）になります。

・・・小島については、後ほど紹介します。・・・

また、興津川の向う岸は「八木間」（やぎま）の集落になります。

・・・八木間の「八木」は、丸太を組んだ筏（いかだ）とのこと。

この筏の集散地だったとも言われています。・・・

手前に見える広い道路は国道52号線、山梨県へ通じる道。いまでは新東名道のICに通じる道です。かつての「身延往還道」は、その先正面の山すそになります。

かなり時間を割いてしまいましたが、この薩埵の峠越えとその脇を流れる興津川の流域は、これ程昔からの交通の要路だったことご理解いただけたでしょうか。

ちょっと一息！・・・薩埵峠越えには、こんな話も残っています。

享保13年（1728年）徳川8代目将軍吉宗への献上品として、2頭の象が長崎に上陸。1頭は、長旅の疲れからかまもなく病死。1頭は、陸路この薩埵峠を越えて江戸に向かった旅だったそうです。きっと、この象は興津川を渡り、この峠を越えるのには、かなりきつかったでしょうネ！

あとひとつ！

かつて江戸時代、この薩埵峠を越える「朝鮮通信使」や琉球の「慶賀使」「謝恩使」あるいは「参勤交代の殿様」たちのために、いくつかの道が地元の人たちにより造られたのです。

えっ？江戸時代って「鎖国」のため、外国人の入国が禁止されていたのでは？

ヨーロッパからの入国者やキリスト教に直接関わる人たちの制約は確かにありましたが、政治的交流（交歓）や教育・文化などの交流には、一定の制約はあったもののかなりの行き来があったとされています。それが「象」や「朝鮮通信使」・琉球の「慶賀使」「謝恩使」の話となります。

これら大所帯の人々の通行のため、地元の人たちは、そのたびに峠の道を改修したり拡幅したりしました。

それらを「上道」・「中道」・「下道」と区分していますが、今はその道の確認は困難かもしれませんが、内洞コースが「上道」ないしは「中道」のイメージに近いと考えられます。「下道」は、JRの線路あるいは国道をイメージしてはいかがでしょうか。

8 いよいよ東海道17番目の宿「興津」

広重の絵に、興津川の河口を蓮台渡しに乗ったおすもうさんが、峻しい崖が迫っている波の押し寄せる海岸を渡っている「浮世絵」はあまりにも有名ですが、でも、まだここからすぐには「興津宿」には入れません。

興津川の河口西の海側に、興津の町では異色の高いビルがあります。

山梨県石和（いさわ）より原泉を運んでいる温泉ホテル「健康ランド」です。旅の疲れを癒すための宿泊施設としては絶好ではありませんか？。海側の各部屋からは夕暮れ時には「赤富士」を、そして朝方は、富士山・伊豆の連山からの日の出を楽しめるロケーションです。

でも、ちょっと待って！この建物の目の前はバイパスです。

バイパスからは、直接玄関前には行けませんので、交通のご案内をします。この健康ランドの出入り口は、旧道沿い興津団地入り口の前に信号機がありますが、この信号機を利用して**バイパスの下を潜る道**を利用してください。

・・・バイパスからの直接の出入りはできません。・・・

東側蒲原・由比・山下海岸方向からの人は、一旦52号線の信号でバイパスを降りて、その交差点を東向きに戻るように進んでください。西側清水・清見寺方面の人も、この52号線の交差点を東向きに進んでください。

いずれも52号線の信号機の東「県営団地入り口」の信号から、右手バイパスの下を潜ってください。

街道筋の話に戻します。

この信号機・団地付近から国道52号線の交差点のすぐ西側、郵便局の先、右手に「石の鳥居」がみられますが、この反対側南側（海側）の一带は、かつて「松原」と呼称していた地域です。海からの強い風や波を食い止めるために植えられていた松林でした。太平洋戦争の末期、これらの松は伐採され、その松脂から飛行機や自動車・船舶の燃料を抽出したため全て伐採されてしまったそうです。昔の街道筋の松並木をイメージしてみてください。

・・・手焼きの鯛焼き屋さんの香りが
気になりますネ。・・・

その隣、商工会の裏手や西側の公園の敷地は、かつての松林や浜辺だったところ。周辺には、玉石の積み重ねられた石垣やその後造られたコンクリートの防波堤も残っています。

「プラタナス」の大きな木に気がつきましたか？

明治の後半に、興津駅のすぐ裏手にある「試験場」へイギリスより寄贈され

た、日本名「すずかけ」の2世です。

そしてその右手（北側）の鳥居が「宗像神社」（むなかた）の入り口になります。小学校の中を横切るように通り、二つ目の鳥居を潜り、神社の本殿の前に出ます。・・・旅の安全を祈りますか？

参道の一番奥、小学校への通路の脇に、崩れた鳥居の石が積まれています。そばへ寄って、年号や刻まれている文字を見てください。これが、倒壊する以前の鳥居の石です。

9 身延往還路・・・地元では「甲州道」（こうしゅうみち）と呼ぶ。

入り口の鳥居のところに戻り、東海道を西へ進みます。

国道をあと少し西へ進むと、右手「信用金庫」の三叉路の脇に、いくつかの「石塔」が並んでいます。かつての「身延往還路」の分岐点・・・地元の人、今も「甲州道」（こうしゅうみち）と呼んでいる道です。・・・分岐点、身延道の道標があり「石塔寺」の所在していたところです。

・・・ずんどう焼きの香りは消えてしまいました。

2017. 10. 10をもって、閉店！残念！・・・

かなりの年数、興津の製館の仕事をしてこられたご主人です。

ここから「身延往還路」あるいは「甲州往還路」について少し触れます。

現在は、国道52号線の交差点（信号）から自動車は入るようになりますが歩く人は、この身延道道標からのコースの方が昔のイメージを感じるものと思います。

いろいろな書物に「是より身延山への参詣道也、麓まで十三里余」の石塔のことが書かれていますが、石塔寺が廃寺になったことから、その親寺の「耀海寺」の境内に現在は保管されています。

・・・耀海寺は、次のページから記してあります。

興津宿の入り口、興津宿公園・交番の裏手にあります。・・・

すぐ先のJRの踏切を越え、興津中学校入り口・水道山入り口を通り、八木間（やぎま）の地域になり、東名高速道のガードを潜り、その先新幹線のガードを越えると「横山城」のあった谷津（やつ）と続きますが、実はかつての身延路は、新幹線の建設のために、八木間の一面がかなり変更されています。

さらにその「古道」となると、興津中学校の正門前から水道山のゲート前の山すそを通り、新幹線のガード下を通る道ともいわれています。それは、この新幹線のガード下を潜り八木間に入るといくつものお寺の下を通ることの出来

る道があり、谷津の**横山城社**の入り口近く、現在は「県消防学校」の近くまで続いています。・・・お寺の一覧は、末尾に掲載してあります。

残念ですが、横山城跡への立ち入りはできません。

この先52号線へ戻って、**興津の最北端、承元寺（しょうげんじ）**

ここで、この臨済宗妙心寺派の「承元寺」の歴史ついて一言だけ触れます。室町幕府は、鎌倉幕府と同様、禅宗を支持し、全国に「安国寺」と「利生塔」を建立しましたが、**駿河の国の安国寺**は、1345年（康永5年）ここ「承元寺」とし、利生塔を「清見寺」に建立されたという歴史があります。

またまた道路マップに戻ります。

興津の先の52号線は、**小島（おじま）・但沼（ただぬま）・小河内・富士見峠**・・・ここから川沿いを下ると、富士川の沿線**芝川**になります。・・・そのまま進行すると**宍原（ししはら）**県境の峠を下り、山梨県南部の町中を抜けて、**相又峡温泉**を通り、日蓮宗総本山「久遠寺」の所在する**身延**に至ります。このルートが「身延路」の謂れになります。

このルートで集落のない一帯は、かなり道幅は狭く、また集落の家の軒先や石垣が道路いっぱい建てられている家もあります。くれぐれも、通行の安全を祈念いたします。歩行には、かなりの時間を要しますし、公共の交通バスは走行しておりません。「宍原（ししはら）」は、ゴルフ場・第2東名道IC・物流倉庫などの建ち並ぶ地域に急変してしまいました。

途中の集落の小字には、古を思わせる呼称がいくつかあります。

また、小島の集落の興津川の向こう岸の集落は「**立花**」。この集落を横断するように山を登ると、由比の倉沢や町屋原へ通じる、かつての街道筋となります。海岸線の薩埵峠下（山下海岸）の通行は、天候によりままなりませんし、遠回りになります。浜石岳の手前を通る「立花」の山越えの街道は、とても便利だったとの記録が残されています。

10 興津の町・身延路入り口「中宿」です。

前項の石塔寺跡の場所に戻ります。

この周辺は、**中宿（なかじゅく）**と呼んでおり、甲州との商売を主に営んだり興津宿の本陣や旅籠を相手に商業を営んでいた人たちの地域になります。

JR興津駅入り口を挟んだこの地域の街道筋の家は、かなり年代を想像させる古い家が何軒か目につきませんか。その多くの家は、通りに面した側は「みせ」

としていたため、かなり広い間口と立派な造りの2階建てになります。そして、それぞれの家と家との間に狭い小路があり、その小路には、それぞれのお宅の玄関があるのです。

・・・エッ？玄関って、普通表通り側ではないの？横の小路にある？・・・

この建物の姿からも、商いを主として様子が想像できると思います。

右手、静岡銀行の建物の隣に「石造りの2階建ての建物」に気がつきましたか？・・・「**繭(まゆ)市場**」の跡です。昭和30年ころまで、ここでは「まゆ」の取り引きが行なわれていました。当初の建物の半分が残っています。見学をしたい人は、銀行の塀越しに見るようにしてください。絶対建物の前までは進まないでください。倒壊注意！

「石蔵」の話としては、興津の海岸沿いには、かつてはいくつかの「伊豆石」を使用した石蔵がありました。地震対策なのでしょう。そのほとんどが姿を消してしまいました。そこで、比較的わかりやすい石蔵をご紹介します。

JR興津駅の手前にお茶屋さんがありますが、表側から見ても、その雰囲気を感じます。もちろん、お茶屋さんは、この石蔵を現在も使用中です。

さらに街道筋、駅前を西へ進みます。・・・「**興津宿**」

「東海道分間延絵図」を見ると、前に記した「石塔寺」・駅前入口の「龍興寺」さらはその西の「理源寺」。今は存在していませんが「本立寺」などが連なって描かれています。

理源寺の先、「沢端川」という小さな川を越え、左手(海側)の「岡屋」さんを過ぎ、右手(山側)は、かつての「問屋場」の跡地は、興津交番・興津宿公園。庵原郡興津町の時代は、ここに町役場がありました。

ここを過ぎると、今度は、間口がわずかの家が目につくようになります。この地域が「**興津の宿**」の地域になります。現在は、「興津本町」と呼んでいます。

東西2軒の「本陣」・「脇本陣」の大きな旅籠に対して、小さな旅籠(立て場・茶屋)あるいは「木賃宿」・「しもた屋」と呼ばれた、ちょっと休憩するお休み処などが軒を連なる宿場町。

当時は、税金を間口の幅で計算されるため、規模の小さな家は、当然のこと間口を大きくとりません。昔流の表現をすると、平均2間半(4.5m)。狭い家では、1間半(2.7m)幅の家まであります。しかしその多くの家は、通りに面しているところは2階建て、進行方向左手(海側の家)には、通りから海岸までの細長い家もありました。

残念ながら、興津の町は、明治22年鉄道の敷設のため、山側の一帯は、「線

路」と化しました。交番の脇は、耀海寺の「山門」・興津宿公園が「問屋場」。「伝馬所」になります。さらには、清見寺の境内の中の線路が通っているところが「高札場」。これらが最も明確な証になります。その他、興津宿の山側に存在していた本陣・脇本陣は、すべて裏手の山側に線路を通すため縮小・移転が余儀なくされてしまったのです。

さらに加えて、昭和8年から10年頃には、道路が現在の道幅に拡幅され、歩道も設けられたため、蒲原や由比のような江戸の昔を連想させてくれる建物は建て替えられたり、「曳家」（ひきや）によって移動することとなってしまいました。言い換えると、興津の街道筋は、蒲原や由比と違って、昭和10年前後の町の姿を想像することのできる街道筋といえると思います。

建物としては、沢端川の西「小阪畳屋」さんとか「桐林肉屋」さん・「岡屋さん」その西隣り「海山堂」さんや「堀江」さんは、当時の建物といわれています。

そして昭和36年（1961年）庵原郡興津町は清水市に合併。

それまでの最も誇りとしていた「海岸線の埋め立て」がはじまり、町の空気は大きく変わってしまったのです。江戸・明治以来のリゾート地・別荘地の興津は急変してゆくのです。

国道の海側にバイパスが通っていますが、その位置は、かつての波打ち際だったと想像できますか？・・・

その興津の海岸線を確認できる道は、そのバイパス沿いに石垣や堤防の跡のある道が残っています。私たちは「浜道」と呼んでいて、2月の「寒桜」の時期は、とても賑わいをみせるところです。

街道筋で唯一昔の姿を残しているのは、かつての西脇本陣「水口屋」です。昭和60年（1985年）に廃業しましたが、その後を株式会社鈴与が買い入れ、一部改修してギャラリーとなっています。

・・・入館料は無料。10時より16時まで・・・

展示物には、明治の政治を動かした、伊藤博文や井上馨・三条実美らの書や昭和32年（1957年）第12回国民体育大会の折宿泊された昭和天皇・皇后両陛下にまつわる品々が展示されています。是非、立寄って見てください。

その他、興津の町の面影は、今般の東日本大震災の影響か、耐震化工事の推進と津波対策という施策により、これら「昔」を連想させてくれる建物や石蔵が次々と姿を変えてしまっています。残念なことです。

このような理由から、興津宿の昔の姿は想像するところとなりますが、その中でも、昔ながらのことをいくつかご紹介します。

そのひとつは、「**興津宿**」についてです。

東海道五十三次17番目の宿場町といわれていますが、「**おきつ**」の語源は九州の宗像神社の記録の中に「沖之津」という語がありますが、ここ興津の宗像神社は勧進されたとの由来があり、「**奥津**」「**息津**」などとも書かれたとの説もあります。

二つ目は、平安時代末期より、代々「**興津氏**」の知行地で、鎌倉幕府からその知行を安堵され、応永30年（1423年）8月今川氏親から、本知行されています。「今川水軍」ではないかと推定されますが、その時から「**興津**」となったとの説もあります。・・・この史実は、耀海寺でお確かめください。・・・

三つ目は、水口屋の少し先信号機のある右手（山側）に「和C a f e茶楽（ちやらく）」というお店の脇を山の方へ入ってください。

警報機の踏切を渡ったところに「**波切不動**」（なみきりふどう・人によっては、「はきり」と読む人もおります。）の説明板があります。

耳を澄ますと瀧の音が聞こえませんか。少し坂を上った祠の裏手に瀧があります。・・・石段は、絶対通行不可。・・・

これを「**不動尊の瀧**」と呼んでいます。先ほどの信号機のところにあったバス停の呼称「**興津不動前**」の名前覚えていませんか。

なぜこのご紹介をしたかという、まずひとつは、町中のそれもJRの線路の脇 こんなにも近いところに自然のままの瀧が存在するということです。

興津宿の地形です。・・・この先の清見寺・清見瀧の地形や地盤とも推察してみてください。まさに**ジオラマの一角**です。

あとひとつは「**波切**」のいわれです。

この信号機から次の信号機マックスバリュあたりまでのことを、小字で「**勝間**」（かつま）と呼んでいます。

この「**勝間**」の言い伝えにその秘密が秘められているのです。

あくまでも言い伝え（口伝）ですが、『時代は、鎌倉いやもっと以前かもしれませんが。海で争いをした武士が、この前の海岸で先陣を争っていたところ、大きな波が押し寄せ、波は左右に別れて、その一方は東の方へ流されてしまい、一方は、清見瀧の岩により助かることができた。「波が、左右に別れた」ということから「**波切**」と呼ばれ、それは、ここのお不動さんの助けによるものということから「**波切不動**」と呼ばれた。そして、勝利を得た海岸から「**勝間**」といわれるようになった。』とのことだそうです。・・・信じますか？

この話の真実は別として、この前の海岸は、たしかに大波が押し寄せると、岸へ打ち上げる波に対して、左右に別れるという現象は、筆者が子供のころ、海水浴で体験したという記憶があります。・・・（今流の言い方では、**沿岸流**？）

興津川から興津宿（興津中町・興津本町）あたりまでの海岸線は、かなり古い記録では「許奴美ヶ濱」（こぬみがはま）と呼んでおり、埋め立てがされるまでは、漁業と製塩を生業とする人たちであふれていましたが、全て埋め立てられ、バイパスが昔の波打ち際にあたる箇所には造られました。海岸沿いの「浜道」や昔からの防波堤の石垣がところどころその姿を残しているのが確かめられます。

・・・興津生涯学習交流館・図書館の周辺の公園は、2月上旬に開催される「寒さくら祭り」時は、この公園の一带には「寒さくら」が咲き誇ります。わずか1日の行事ですが、毎年1万人を超える人々で賑わいをみせます。

ここで、かつてこの興津の海岸の生活をエンジョイした人あるいはその願いを持っていた著名人を、順不同にはなりますが何人かの名前をあげてみます。
(礼を欠きますが、順不同・敬称は省かせてください。)

正岡子規・・・病のため、東京根岸でその生涯を閉じてしまいますが、興津の海岸沿いの家で、河東碧梧桐らの尽力により療養する計画が立てられていたが、症状が悪化したため実現できなかったということでした。清見寺の正面、道路脇に小さな公園が造ってあり歌碑が建てられています。

佐藤愛子・紅緑の書物の中に、「興津での生活」のことがふれられていますが、もちろんその当時の建物は残っていませんが、海岸沿いの石垣は確認できます。

同じく女流作家、**吉屋信子**が、執筆活動をしていたお宅も確認できます。俳句に長けた方にはご承知のお名前かと思いますが、**富岡風生**。

日本軽金属の賓客として、太平洋戦争前より戦後昭和30年代まで、本社業務を行っていた「川崎別荘」で、何回となく興津の生活を送っております。

少し時代が戻りますが、明治の後半には、**高山樗牛**も、何回となく興津を訪ねその執筆活動をしておりますし、彼を支えた姉崎嘲風（正治）との来訪の記録があります。

終戦を控えて新潟へ転居してしまいますが**堀口大学**もそのひとりです。

宮沢賢治は、岩手の農業高校の卒業ですが、大正5年（1916年）その卒業旅行に試験場を訪問しています。

まだまだ。以下お名前だけになりますが、

明治20年代の**夏目漱石**をはじめ、**与謝野晶子・島崎藤村・姉崎嘲風（正治）**

・・・高山樗牛の主治医でもあり哲学者

太平洋戦争後としては、**山下清**なども挙げるができます。

姉崎嘲風（正治）は、坐漁荘の来訪者名簿にもしばしば記録されています。大正12年（1923年）9月1日、関東大震災に見舞われましたが、高齢であった**松方正義**は、この時西園寺公の計らいで、東海ホテル（一説では川崎別荘との説もあるが・・・）で2年近くの「避難生活」をしており、西園寺公は、何回かの見舞いをしています。最後、東京の三田の自宅に戻って逝去しました。

外国の人、特にアメリカ人の間では、今以てベストセラーのひとつと数えられている**オリバー・スタットラー**（米国人）という、かつて進駐軍の文官だった人が、1961年（昭和36年）「**ジャパニーズ・イン**」邦訳「**ニッポン歴史の宿**」・「**東海道の宿**」を出版。戦後、日本人が物質的な豊かさに目を奪われて伝統的な価値観や文化を見失っていく中で、興津に、精神的豊かさを見、西園寺公が戦前この町から、戦争回避を唱え続けたことを描いています。

いずれの人たちも、興津の風光明媚な海岸や清見寺を主なステージとして利用していたようです。

JR興津駅プラットホームの山側に広い敷地の「農園」があり、正面ゲートには、**プラタナス（日本名、すずかけ）の並木**が見え、その圃地にはみかんの木が整然と植えられ、甲州道沿いまで続いています。この広い敷地が現在は、国の政策により「農研機構果樹研究所」と呼ばれていますが、1902年（明治35年）に**井上馨**の働きかけにより開設された通称「**農事試験場**」です。

ここ試験場に関わる話は数多くありますが、代表的な話としては、今もアメリカ・ワシントンのポトマック河岸に、日露戦争の終結を記念して、日本から贈られた桜が咲き誇るニュースが出ますが、熊谷八十三氏・・・1924年（大正13年）より、西園寺公望公の執事として従事した人・・・らによりその苗木を育苗したところ。明治の末年のことです。

この試験場の左手中腹の小高いところに、今は、その建物はなくなりましたが、1918年（大正7年）伊藤博文公の嗣養子、伊藤博邦公の別荘「**独楽荘**」（どくらくそう）がありました。嗣養子ということは、血筋では、井上馨侯の子、勝之助の弟にあたります。そしてその子博精の妻、福子さんは、なんと高橋是清の孫娘になります。

この敷地は、現在は研究所の圃地として使用・管理されておりますから、出入りには制限がありますが、2月の上旬「寒桜まつり」の日には一般開放され、100種類余のみかんを手に触れることができますし、「独楽荘」の敷地跡へも立ち入ることができます。海岸沿いの「寒桜まつり」も結構ですが、開設以来

1000年を越える施設や寒桜を育苗した場所、そして伊藤公の別荘の跡地などと歴史を知る施設として、駅からわずか数分のところにあります。是非年1回限りのチャンスを逃すことのないように訪問してみてください。

1 1 興津の町をさらに西へ進みます。・・・清見瀉・清見寺

清見寺の下から、興津と袖師の境界「波多打川」（古い記録では、旗打川）（はたうちかわ）（別名、角田川）までは、万葉の古よりその景観に親しまれていた「清見瀉」（きよみがた）となり、この境界の集落は「濁澤」（にごりさわ）と呼ばれていて清見瀉の西端になるのですが数多くの昔話があります。

万葉の時代、防人がここ清見瀉で休息。旅の途中で癒したのでしょうか。いくつかの歌が残されています。以来数多くの「清見瀉」にかかわる文献や作品が残されていますが、最も有名ともいえる作品は、菅原孝標（たかすえ）の娘が父の赴任先から上総（千葉）へ戻る旅で書き留めた「更級日記」の一節ではないかと思えます。なんと今から900年以上も昔のことです。

さらには「清見寺」

清見寺の詳細なことは ここでは割愛させていただきこのページの下段と末尾の「特別編」を参照してください。

まずは「清見ヶ関」（きよみがせき）にまつわる話。

（一部古い文献では、浄見ヶ関と記しているものもあります。）

その語源、まずは目の前に多くの岩があった「清見瀉」についてです。

ある人は「万葉の郷」とも表現しておりますし、埋め立てられるまでは、文学好きな方々にはたまらない景色でした。

・・・坐漁荘には埋め立てられる前の海岸の写真が数多くあります。

今以て清水区の生涯学習の学校「清見瀉大学」は、その名を引き続き活動に力を注いでおられます。

また、当時の庶民の生活としては きれいな海水の海岸でしたから、専売品の塩の精製も、漁業のかたわらの主な仕事でした。さらに、この海水を家の風呂に入れた「海水風呂」は、夏の汗疹の治療や予防にするという習慣が地元ではありました。

ここで 清見寺・清見瀉・許奴美ヶ浜にまつわる話としては尽きることがありませんが、少し紹介させていただきます。

清見寺の紹介も兼ねますが、前の9「承元寺」のところでも触れましたが、足利氏が、駿河の国の利生塔を置いたことがその始まりといわれています。それ以前は、清見ヶ関（浄見ヶ関）として、旅人の安全・国や地域の保安のための役割を果たしておりました。

また、徳川家康公が幼少期「竹千代」と称していた時代、今川家の人質として駿府「臨濟寺」に身を置いていましたが、ここ「清見寺」を訪れ、「太原崇孚禅師」の下で勉学に励んでいた時の部屋「手習いの間」もあります。

・・・2019年は 今川義元公生誕500年の節目の年にあたりますので
その功績や歴史が 紹介されることと思います。参考にしてください。

そして時代が進んで 徳川家康が駿府に城を構えると、唯一の外国との交流の国朝鮮の国賓をもてなす所として、景観のすばらしい清見寺を朝鮮の通信使は、宿舎や休憩所として活用。文化の交流が交わされました。清見寺には 総門の扁額「東海名區」をはじめ 数多くの書や扁額が残されました。

これらが今般「ユネスコ世界記憶遺産」として認められたのです。

一方、琉球の慶賀使として来日した「具志頭王子」は、江戸への旅の途中駿河で死亡したためその墓地を敷地内に建立されています。朝鮮通信使よりも数多く立ち寄ったことが記録されています。

明治22年2月に鉄道が開通しましたが、その夏明治天皇は その皇太子（のちの大正天皇）を連れて清見潟で海水浴を楽しませたので、本堂の奥に「玉座の間」を設けたといわれています。

明治になって、この鉄道の開通にあわせて興津宿の本陣・脇本陣・旅籠などの主たちは、興津の海岸・清見潟を観光資源とした「リゾート地」としての開発に力を注ぎ、自らの宿（やど）を栄えさせ、興津駅前にはこれらの来訪者を相手とする土産物屋・食堂（カフェ）を開業させました。

さらには、井上馨侯の別荘をはじめ説田・川崎・大倉・阿部氏らの別荘がつぎつぎと建設され、大正8年には、西園寺公望公が「パリ媾和条約の締結」という大任を果たした後、「坐漁荘」を自らの静養の館としての生活を始めました。そして、前に触れた「試験場」の一角には、伊藤公が「独楽荘」。そのすぐ下の一角には、御陵牧場の管理責任者坂本正治と次々に別荘を建設。この他数多くの文人が来訪執筆活動のため逗留したことが伝えられています。

以上、興津の話があちらこちらへと展開しながら長々と続きましたが、興津という町には、これほどの「歴史と文化」の詰まっている町ということをご理解いただけたでしょうか。

12 いよいよ次は、**横砂・袖師** 地域になります。

興津と横砂との境界に流れている「**波多打川**」(はたうちがわ)は、その上流は興津川の上流「清地」から始まっていますが、昭和49年(1974年)静岡市内を襲った「七夕豪雨」の際、大きく氾濫し河口の大きな三角州の姿がなくなっていました。そのため、川の流れを変え今の姿になりました。

車の道路はJRを跨ぐ陸橋ですが、この陸橋も昭和8年から10年に国道が拡幅された時 興津川の鉄橋建設と同じ頃に造られた陸橋です。(跨線橋)

ここで、**ウォーキングを楽しむ人へご忠告!**

この陸橋は昭和8年~10年の建設と云うことで、かなり道幅が狭く歩道也没有。交通事故の心配が大です。この陸橋を歩くことは避けてください。というより「**古の街道筋**」を歩く人たちのために、それ以前の江戸から明治時代の街道を思わせるルートをご紹介します。

波多打川の脇にガードレールがありますが、それに沿って西へ進むとバイパスの高架下になり、川を渡るようになっていきます。そこから階段でいけばわずか2~3段下がり、狭い道を10mほど進んだところの正面T字路を西向き(右)に曲がります。さらにJRの小さな踏み切りを渡ります。陸橋を下った「延命地藏」の祠のところで合流しますが、この道こそ「**古の東海道**」になります。

夏の期間だけ車が臨時停車して、水泳教室や海水浴という昔懐かしい「**袖師の海水浴場**」を訪れたい人は、このT字路を東向き(左)に進むと、海岸へ向かう狭い道があり、数m進んだところが昔の海岸線になります。当時の石垣がまだそのまま残っているので、すぐに確かめられると思います。昔海水浴をした所は、正面の湾岸道、車が左右に通行しているところになります。

もうひとつ。この古道の進行方向右手の家屋の屋根の後ろ、拡幅された国道の路肩部分にあたる場所の「**断崖跡**」に気がつきましたか?

このあたりは、「東海道分間延絵図」で確かめると「**袖ヶ崎**」(そでがさき)と記されています。まさには、TV水戸黄門の終わりのシーンに登場する海岸線と河口の砂地を歩く黄門様ご一行の姿が想像できるのではないのでしょうか。

さらにつけ加えると、この波多打川の上流、国道とJRを隔てた向こう側に、山に囲まれた「**窪地**」の一带が見えますか?

言い伝えでは、浄見長者（清見長者）の住いだったところ？

この窪地一帯が、**井上馨侯**が1896年（明治29年）別荘「**長者荘**」を（ちょうじゃそう）建てたところになります。

現在は、かつての敷地の中央部分あたるところに「**静岡市埋蔵文化財センター**」があります。

今はその姿を見ることはできませんが、窪地の中央には「**米糠山**」（こめぬかやま）と呼ぶ小高い丘がありました。昭和40年（1965年）ころまでは、この頂上に「**井上空手道場**」がありました。40歳前後の年齢の人のなかには、もしかしたらこの空手道場へ通った人もいるかもしれませんネ。

「埋蔵文化財センター」には、後から触れる廬原（いほはら）・・・現在の「庵原」の一帯で発掘された、縄文時代のころからの埋蔵物が展示・保管されています。考古学に興味のある方は、是非立寄ってみてください。休日にご注意！

この「埋蔵文化財センター」への道は、徒歩の人には波多打川の東岸（興津側）からは川の手前の横断歩道の横に「狭い路地」がありますが、ここの「茂畑踏み切り」（もばた）を渡ってすぐ左折。そのまま線路沿いに進むと波多打川に架かる「**井上橋**」を渡って、右手住宅地の間を抜けて正門前に着きます。

自動車の人は、JRを跨ぐ「横砂橋」を上り、その頂点から右手に曲がり、坂を下り、バイパスの下を潜ると正門前に着きます。駐車場はもう少し先センターの建物の裏手になります。

なお、長者荘の解体・分譲の際に建立されていた**井上侯の坐像**と**渋沢栄一と杉孫三郎（号名、聴雨）による石碑**の碑文は、さきほどの波多打川を渡る手前東岸の清見瀉公園の西端に移動・建立されています。

もうひとつ。徒歩で下の道からJRの踏み切りの道を通った人へ。

この踏み切りを渡る左手向かえの線路沿いの「**石蔵**」に気がつかれましたか？

今以て裁判の最終判決がされていない「袴田巖」氏の事件のあった味噌屋の蔵です。数少なくなりましたが、何軒かに「**格子戸**」も見られます。

立体交差の横砂橋あるいは横砂の踏切を渡り、再びかつての国道と合流します。「延命地蔵」の祠で、旅の安全を祈願しませんか。

ここから西向き200m余が「**横砂**」（よこすな）です。

左手奥に保育園がありますが、この敷地が、清水市内からの路面電車の終点（車庫）のあったところ。袖師の海水浴へ訪れたことのある人には、思い出のあるところかもしれませんネ。電車は七夕豪雨により廃線されましたがその線路跡は歩行者専用道として庵原川の東岸まで続いています。

・・・「**袖師**」（そでし）は、もう少し先（東側）になります。

東海道はかなり狭い道ですが、その脇に何軒かの古い建物がみられます。そ

のほとんどは、以前商いをしていた家々になります。

その途中、右手に入る狭い道を通り横砂自治会館前のバイパスの地下道を潜ると、「**廬崎神社**」（いほさき じんじゃ）の境内になります。

この神社の上にお城が見えます。よく旅人から「何城ですか？」と聞かれるのですが、実はこの神社の上には浄水場があり、そのモーター室の建物がお城となっているのです。・・・袖師城、横砂城とは呼ばないでください。・・・

その先、再び国道へ戻り、さらに西へ進みます。

「**東光寺**」を過ぎるあたりから、道筋がかなり広くなります。そしてその先「**庵原川**」を渡るあたりには、20年余位前までは、昔を偲ばせる大きな街道筋の松が何本かありました。その代わりとして、街道筋の松並木ではありませんが、この庵原川の川下JRの鉄橋の向こう側「一葉橋」のたもと西岸側には、当時を偲ばせる、かなり太い松が数本残っています。そして、川を越えた左手「**榊屋**」という飲食店がありますが、その出入り口に、かなり年期の入った松が1本あります。この松は、かつて井上侯の別荘「**長者荘**」の庭に植えられていた松の1本です。

・・・話ついでに、長者荘の遺産をご紹介します。

そのひとつは、清水区役所庁舎の正面駐車場に大きな「**蘇鉄**」があります。これは移植して保存されている物のひとつです。すでに通り過ぎてしまいましたが、JR興津駅前のポケットパークにも大きな石がありますが、これも長者荘の遺産のひとつです。・・・

13 話は元の国道の話に戻します。庵原川の橋の上です。「袖師」

ここは古道「**鎌倉街道**」を東進してきた道の合流点になります。

庵原川の右手「**上流側**」の正面に新幹線が通っていますが、この新幹線を越えバイパス沿いから桜並木のトンネルがおよそ1km堤防の上につながります。桜の花の季節は、とてもすばらしい散歩道になります。

・・・歩行者のみ通行可。ジョギング・散歩のベストコース・・・

またその先、バイパスの向こうは、新東名へのジャンクションの道が頭上に円を描いておりますが、かつては、みかんが大量に栽培されていたところです。そしてその先には、年明けの冬山頂に雪が積もるほどの山が見えますが、甲州武田軍が通行しただろ県境の「**峠道**」となります。

この地域が「**廬原の国**」（いほはらのくに）の一带となります。

庵原中学校の裏での小高いところ 三池平古墳の跡地には、ナショナル・ト

レーニングセンター。一方西側の「庵原小学校」の裏手には、庵原球場などの新しい時代の施設が造られましたが、その周辺「小里地区」には、古墳時代の中期6世紀前半といわれている、全長70mの「衙」・「古墳跡」。この他、バイパス沿いの「神明古墳跡」から「尾羽」まででもいくつかの発掘がされ、考古学に関心の高い方たちの訪問を受けております。ここで発掘された遺物の多くは、前ページで触れた横砂の「静岡市埋蔵文化財センター」に展示されています。

改めて整理してみますと、庵原川を堤防沿いに登って、右手は、庵原中学校。左手の流れに沿ってゆくと、明治当初からという歴史ある「庵原小学校」の前。このあたりで左右を見てみると、山すそに道がありますが、このルートが江戸以前の東西の道の跡といわれています。

- ・・・「いほはらの郷」の近くを訪ねて1周散策するには、2時間程が必要。さらに奥手は、路線バスの運行はありますが、その本数は少ないので、自動車利用となりますが、伊佐布（いさぶ）の滝」や「吉原温泉」この地域は、富士山の絶景ポイントや吉原茶特産地でもあります。さらに、精進料理を提供してくれる杉山の「潮海寺」（事前予約制）などかなり古えを堪能できる所もあります。

・・・精進料理は、お問い合わせをしてください。・・・

17の「いほはらの国」で再度触れますが、実は興津のひとつ奥の「小島」の藩主松平信治は、ここ庵原を含め旧静岡市との境の西奈・瀬名の地域、広くは「麻機」と表現しますが、浅間神社や臨濟寺のある賤機山の東側の一帯から、山梨県の県境までの地域を支配していたのです。

- ・・・沼津のJR原駅の近くに「松蔭寺」があります。この**白隠禅師**は、この沼津の原で生まれ、松蔭寺で得度しました。禅師は、衰退の兆しがあった臨濟宗を復興させるために尽力した名僧として、清見寺も含め多くの史実や実績が伝えられていますが、この白隠禅師の話から、これらのことがはっきりすると思います。

・・・詳しくは、白隠禅師のことを参考にしてみてください。・・・

国道に戻ります。

庵原川を越えて **袖師**（そでし）の集落を通過。

道沿いに、かなり古い建物も何軒か見受けられます。興津と同様1階部分は、その多くがサッシに改築しているため解りにくいかもしれませんが、2階の軒下・庇あたりに注目してください。

そして、その道筋の中間あたりに何本かの松の木があります。・・・「なごり

の松」とも呼ばれています。イメージとしては、ここらあたりは「松並木の街道跡」ということでしょうか。

14 もう少し西へ進みますと、複雑な交差点に出合います。

「西久保」です。

三叉路の正面、左右に別れる道があります。その三角の箇所、細い松が1本あります。「細井の松」と呼んでいます。

左手広い道は、かつて「路面電車」が通行していた道で、JR清水駅方面から港橋まで。その先「三保の松原」・「久能山」方面へとつづく道となります。

右手の狭い道が、かつての「東海道」といわれているルートになります。このあたりの町名は、江戸時代になってから江尻の宿が造りかえられますが、その時から「辻」と呼ばれるようになった地域です。

・・・それ以前の「辻」は、現在のJR清水駅の真西「小芝町」付近から、巴川を渡る「大曲」（おおまがり）あたりともいわれています。・・・

そのまま進むと、右手奥に小高い丘が見えます。12月に「火渡り」のお祭りがあります。地元の人たちは「秋葉さん」と親しく呼んでいます。

かつての東海道江尻宿の「木戸」に該当する地域になります。

江戸以前は、この秋葉さんの麓から奥（西）に進んで、現在は「北街道」と呼んでいる山沿いの道になります。清水東高校の裏手、広い道を横断して新幹線のガード下あたりから、その面影が連想できると思います。

・・・北街道（鎌倉街道）のことは後述します。・・・

「秋葉さん」は、神仏融合の社です。小高い丘に登ってみてください。

再び東海道へ戻ります。

江尻辻の「一里塚跡」からJR清水駅を左正面に見ながら横断。現在の町名は「江尻東」と改められましたが、ここから「江尻宿」の面影が描ける町筋がほんのわずかですが残っています。

「鍛冶町」・「鋳物師町」・「伝馬町」と今も呼称している地域です。

ここでちょっと寄り道！JR清水駅に立寄ってみます。

・・・どうも、筆者は、途中の寄り道が好きなようですネ。・・・

JR清水駅は「東海道」からはやや左手（東側）。

駅前のロータリーも広い通りに面しておらず、スクランブル交差点より一步

奥まっていますから気をつけてください。

・・・なぜ寄り道をした？

それは「清水駅」について触れてみたいからです。・・・

JRの駅舎が高架化されるまでは、駅前広場から富士山が仰げる景色の良い駅前でした。当時からのお店としては、鉄道の駅弁でおなじみだった「やすい軒」・駅前のお土産屋さんの「美濃屋」・生地屋の「大和屋」など当時の屋号のお店は、今もそのお店を続けております。

一度立寄っていただくと、昔の味が思い出されるかもしれませんネ。喫茶・食堂の「桃園」は、今般の再開発により、そのお店は畳んでしまいましたが、ビルの1階で屋号を変えてコーヒー屋さんとして続けています。現在の清水駅では、エスカレーターで高架化された改札口へ上りますが、ここから天気の良い日には、富士山をほぼ全景をみることができます。そしてその足元には、東亜燃料の精製工場は取り壊されていますが、右手（海側）には、今も石油タンクがいくつか残っています。

そのまま通路を海の方へ進むと、駅前広場あるいは海鮮市場（河岸の市）あるいは右手の方へ進めば、かつては貨物駅の線路が何本もありました。現在のマリナート・テルサのあたりになります。

さらに、その先を進むと「三保線」（清水港線）の駅舎のあった島崎町・区役所方面へと行くことができます。

駅前の「アーケード街」は「駅前銀座」と呼んでいるショッピング・モール街ですが、この駅前銀座について、かなりの歴史が秘められているので少し触れてみます。

そのひとつ。7月7日「七夕まつり」でこの商店街は賑わいを見せますが、このルーツについてです。

それは、昭和20年7月7日清水の町が、艦砲射撃による空襲に見舞われましたが、戦争が終ってから数年後まで、この地域は「闇市」（やみいち）と呼ばれる屋台のお店であふれました。戸板の上に品物を並べて売っている店・丸太に箆（むしろ）を提げた店・大八車をそのまま店にした等など、とても賑わっていました。この店主さん達が、清水の空襲の被災者を慰問するため、そして、自らのお店にお客さんを招く為に、蒼竹に七夕を飾ったということだそうです。

・・・もう70年も昔のこと。時代が変わって、このことを知る人も数少なくなりましたが、乾物屋の「蒲原屋」さんなどのある「港マーケット」がその名残りです。・・・

もう少し、時代を遡って触れてみます。

まず、呼称は「江尻」となることはご承知とは思いますが、鉄道が開通した明治の時代の「駅舎」は、現在の場所よりもう少し西になります。現在の駅を発車して大きく右へカーブ。ガードを潜って踏み切りを越え、巴川の鉄橋となりますが、この大きくカーブをしている手前あたりが最初の「江尻駅」の所在地のようです。・・・先ほどの駅前銀座のアーケード街をずっと進むと、ガードの下になりますが、この周辺になります。

・・・線路の反対側（海側）現在のマリナート・テルサの周辺が、三保線（清水港線）のプラットホームや貨物の引込み線のあった場所。その先が貨物置場。そして現在の「河岸の市」あたりが岸壁になります。「河岸の市」ですから、近海の魚の水揚げがされ「魚市場」のあったところでした。

さらにそれ以前の話としては、この「駅前銀座」のアーケード街の奥（踏切に近いあたり）には、「スイチさん」（S u i c h i）と呼ばれていた豪商が、明治後半から大正時代いくつもの大きな倉庫を構えて幅広く貿易商を営んでいたとのことでした。

庵原（いほはら）が、みかんや農産物の発展をみせた当時、この農産物を、清水駅・清水港へ運ぶため、このスイチさんの倉庫の一角から電車（軌道）が発車したのです。

その軌道は、駅前から辻～秋葉さんの下～西久保、そして現在のバイパスのJAの脇の信号を越えて、庵原川沿いに庵原小学校の方へ通じていたようです。しかし、この電車の運行は、あまり長続きしなかったそうです。

・・・明治43年から大正3年まで。大正5年には廃止・・・

以上のことから、最近「シャッターの目立つ町」とか「グルメ街」などと呼称されていますが、JR清水駅前周辺を改めて見直してみてもいいでしょうか？

15 話を元の「東海道」JR清水駅へ戻します。江尻宿です。

この駅前銀座の奥のJRの「踏み切り」を渡らずに、右手の「清水銀座商店街」に、かつての「江尻宿」が続いていました。

当時の本陣・脇本陣・旅籠などの面影を残す建物は数少なくなりましたがいくつかのお店の「屋号」には、まだその名残を残しています。例えば、介護

施設になっていますが「いはら屋」さんもそのひとつです。探してみてください。

また、一本裏手には、家康の第一子、岡崎三郎信康公の遺髪（おぼりかみ）の御廟所がある「江浄寺」があり、現在は、恋が成就するといわれている「恋塚」を訪ねる人も多いようです。

また、今はかなりその人数も少なくなりましたが、かつて「芸者さん」と呼ばれてお座敷を盛り上げてくれた人たちがおりましたが、今も廃れることなく清水の町で活躍している人たちのOffice（置屋）も、巴川沿いにあります。

その銀座商店街の行き止まりが「魚町」（うおまち）です。・・・現代流に表現をすると「魚市場」があった町です。

ここから正面右手方面が「江尻城」の敷地あたりになるといわれています。現在 江尻小学校の正門の中に、その「江尻城跡」を記す碑が建てられていますが、正式にはここではなかったという説が一般的になっています。

「江尻城」・・・1570年（永禄13年）武田信玄により築城

1601年（慶長、6年）関が原の戦いの後、徳川家康により廃城された。最後の城主 穴山梅雪。

それは、右手北西方面には「大手」「二の丸」などと呼ばれている町名がありますので、この一帯を「城跡」として推察することができるのではないのでしょうか。

ところで、何故、その江尻城やその町筋が消えてしまったのでしょうか。

それは、それまで支配していた「武田家」から「徳川家」にその支配が移る時、徳川家は、全てを焼き消し、新たに「江尻の宿」を造ったことから、武田家が支配していた面影を探すことは極めて困難になっているのです。

・・・江尻城は、城代「穴山梅雪」（信君）から信治に継がれた後、廃城にされました。このことから史実を知ることができるのではないのでしょうか。・・・興津、井上の項「霊泉寺」を参照

さて、その「江尻宿」は左に折れ曲がり、巴川に架かった橋に出合います。これが、皆から親しまれている「稚児橋」通称「かっぱ橋」です。

この他、巴川を下流に向かって行くと「柿橋」・「大正橋」・「千歳橋」・「萬世橋」・「八千代橋」・「富士見橋」・「港橋」から河口150号線の「羽衣橋」まで続きますが、いずれも江戸時代より江尻宿と川湊を往き来して、交通を確保するために架けられたといわれています。もちろん、耐震補強や補修は繰り返されていますが、橋の「歴板」をひとつひとつ調べてみるのも良いかもしれませぬ。

最初の「かっぱ橋」に戻ります。

その謂れはともかくとして、銀座商店街の入り口とここが直角に曲がっていることから、宿場の出入り口・船つき場（湊）とみることができます。

この巴川の「かっぱ橋」を渡って「入江町」に入ります。

「稚児橋」・・・1607年（慶長12年）に初めて橋が架けられた。呼称は、江尻橋から稚児橋へと変わる。この時通称「かっぱ橋」とも呼ばれるようになったとか？

「入江」という呼称は、古く縄文時代当時からこの地域の支配者の名前ですから、この町内はかなり広範囲になりますが、数多くの歴史を語ることで話が存在します。地形としては、まさに「入江」・・・巴川の河口付近。

「江尻宿の出入り口・湊」と表現しましたが、徳川時代には、ここから、さらに西へ移動させ、「追分羊羹」で有名な地域を「追分」と呼称して、清水湊へのアクセス「志ミづ道」を敷設。さらには、湊からの荷物を運搬するための「牛車」のための道「うし道」などを敷設しました。

「巴川」を利用して「水運」により駿府へ荷物を運んだという説が一般的になっていますが、この陸路「うし道」のことは、東海道分間延絵図でも確認できます。

現在の入江地区を中心に、その上流の地域、町名でいえば、二の丸・大曲・渋川・能島などの地域は、この水運と陸道との交差している箇所が数多く見られますので、その地形から昔を偲ぶことのできる地域となります。

有名な「追分羊羹本舗」の近くには、「志ミづ道」の道標がありますし、「大沢川」の橋の脇には「うし道」の説明版も見られます。

「追分羊羹本舗」は、創業が1695年（元禄8年）といわれています。

筍（たけのこ）の皮に包んで蒸し上げた羊羹。・・・蒸し羊羹ですが、カビが生えません。店内には、山岡鉄舟の手紙などの展示もされています。

「追分（おいわけ）」・・・全国各地の街道にも同じ「追分」という地名がありますが、街道の分岐点のことですから、ここでは、東海道・清水湊への「志ミづ道」・久能山への「久能道」などへの道の分起点が偲べる地域となります。

そのまま西へ向かい、JRの追分踏切を横断、静岡鉄道の狐ヶ崎駅から今少し古さを漂わず道を進むと、有度第一小学校の脇「御門台」（みかどだい）になります。

16 ここからは「南幹線」と呼んでいる、新たに拡幅整備された道沿い

「草薙」の地域です。

草薙駅・静岡鉄道の県総合運動場駅・JR東静岡駅まで、その新しい道を通ることとなりますが、所々に古を漂わす箇所もあります。その最も目立つところのひとつが「草薙神社」ではないでしょうか。

ここから山を登ると「平沢観音」の前に出ます。今でも、日本平へ徒歩で行こうとする人々のハイキングロードとして利用されています。

「草薙神社」・・・日本武尊が、鎌で打ち払うように剣を振り、草をなぎ払ったところから「草薙」といわれるようになったとの伝説。その後1543年（天文12年）火縄銃と火薬が伝来。火薬を使った「花火」が考案され、この地で、駿府城と久能山東照宮の守りとして使われるようになった。昼は「龍勢」夜は「流星」という鉄筒が、伝統として毎年挙げられます。

その先、草薙駅のすぐ西側に「桜井戸」という名前がありますが、その昔の「湯治場」「膏薬屋」の呼称です。

さらにその先、静岡鉄道の県総合運動場駅周辺から、JR・新幹線の線路を跨いで国道1号線へ出て、静岡鉄道と並行するように西へ進むと、春日町・横田町あたりから「駿府の城下町」へ入ることになります。

一方、南幹線をそのまま東静岡駅方向へ進み、グランシップの先、曲金（まがりかね）・西豊田の地域に進むと、ここにも江戸よりはるかに古の話が存在する地域になります。

大化の改新以降「駅伝制」が制定され、「駅家」で馬を乗り継いだという話がありますが、ここ東静岡駅の周辺で、その道の遺跡が発見されています。

また、少し時代が進んだ、鎌倉時代の末期「吾妻鏡」の一節に、鎌倉より追放を申し渡された「梶原景時親子」が侵攻の途中、興津の「清見関」で戦闘になり、地元の豪族、飯田・入江・蘆原・工藤・三澤・渋川・船越・矢部・大内らの武将と合戦したが、最後その目的を果たすことがかなわず、北街道の瀬名の近くにある「梶原山」で自刃したという話が言い伝えられています。

・・・梶原一家の供養塔は、北街道（高橋2丁目）にある「高源寺」にあります。

さらには、この高源寺の本堂は、旧の久能寺の建物を移築した重厚な建物で、文化財として保存されています。境内には、その供養塔もあります。また、景時らが自刃したといわれている「梶原山」は、瀬名という地域に「梶原公園」として整備され、標高300m程、およそ1Kmのハイキングコースとなってお

り、そこからは市街地や三保の松原が一望できるところです。

- ・・・まず最初の目標は、瀬名の「光鏡院」を探してください。
ここから登山道に入ります。古道「北街道」の話でした。

17 「東海道の古道」として、さらには「蘆原の国」（いほはら）を理解するために、話は一部重複しますが「脇道」に逸らしてみます。

話はかなり前の13項に戻りますが、興津を過ぎ横砂・袖師を過ぎ、庵原川の鉄橋の上で小休止を兼ねて道の左右に目を向けてみてください。まず左手。JRの鉄橋、その先に数本の太い松の木。その先には、三保の松原を覗うことができます。一方右手は、新幹線の鉄橋・国道バイパス。そして東名道。その先、新東名のジャンクションの道。そして視界を遮るかもしれませんが、遠くの山の小高いところには、新東名道が見えると思います。その山の奥行き深いことに気がつきませんか。1月になるとこの山には雪が積もっている姿を見ることがあります。・・・甲州（山梨県）への県境の山道になります。・・・

「いほはら（蘆原）の国」の中心地域の一带です。

600年半ば、朝鮮半島では新羅の統一が進み、唐が百済を攻め滅ぼした時、わが国から百済再興の援軍を送った「白村江の戦い」（はくすきのえ）。その援軍は、唐と新羅の連合軍に大敗してしましますが、ここ「蘆原の国」から多くの兵が清水湊から出征した地域といわれています。

・・・なにか連想できるような景色と思いませんか。・・・

さらにこの冊子草稿をはじめた2017年10月の新聞紙上に、小里（おさと）で、「古墳時代の中期の集落跡を発見」・「古墳時代の集落のあり方を解明する貴重な発見」との報道がされました。

それは、一辺が3.5～5mの竪穴住居跡が3件。皿には、脚をつけた土器「高坏」（たかつき）が複数出土した。現場は、清水平野の県内最古級の神明山1号古墳や郡衙（ぐんが）・・・役所・・・の関連遺跡があり、古墳から奈良・平安時代の中心的な地域ではないか考えられ、その歴史的変遷の手掛かりになると考えられています。

詳細は、市文化財課または袖師・庵原の生涯学習交流館・横砂の「市埋蔵文化財センター」へお尋ねください。

18 話は戻ります。先に触れた15 **江尻（清水）の町**に入る山側の地域
「北街道」について触れてみます。

町の名前でいえば**「西久保」**（にしくぼ）。

近くの公共施設では、袖師（そでし）小学校や中学校あるいは東海道の沿道に、かつての松林をイメージするために前述しましたが、たった1本「なごりの松」と呼ばれている松のことやその先の「細井の松」。さらにその先の右手、秋葉山（地元の人「あきはさん」と呼んでいます）。秋葉寺や神社のある小高い山の1帯になることは触れましたが、ここを起点に再度**「北街道」**についてひとつふたつ触れてみます。

そのひとつは、14で触れた**「辻」**とつながりますが、その秋葉山の南側、県立清水東高校の裏手、新幹線のガードが交差するあたりから、**「北街道」**を親しむことができます。この地域は、単に街道を散策するのみならず、**「高源寺」**や**「巴川の流域地帯」**でもあります。

その先、現在は国道バイパスの側道周辺になりますが、**「能島」**（のうじま）という地域は、つい20数年前までは「瓦」を焼いていた地域になります。

右手の山の裾は、**「柏尾」・「梅ヶ谷」・「山原」・「蜂ヶ谷」** etc、懐が深くいくつかの谷にわかれ、それぞれの集落には、古いお寺があります。

・・・それぞれに歴史や昔話があるそうです。調べてみる価値があります。

そのまま北街道を西へ進み、**「大内観音」**を通り、**「高部」**を境にして、旧静岡市との市境になります。

大内に**「保蟹寺」**というお寺がありますが、なんと読んだらよいのでしょうか？

この先 静岡へ入ると、**西奈**（にしな）という地域になります。

現在は、**瀬名**（せな）の呼称の方が有名になっていますが、常葉大学の1帯は、比較的議題に登場しませんが**「間の宿」**（あいのみや）がありました。

そのひとつに、この地域には徳川家康公の話として、しばしば鷹狩りの折り立ち寄ったという話もあります。

その奥手には、「二こぶらくだ」のような形の標高1000m程の**「竜爪山」**（りゅうそうざん）と呼んでいる信仰の山の話もあります。

その先、長尾川・巴川を越え「千代田」という地区の**「上土」**（あげつち）と呼ばれている地域は、その昔、巴川の水運の荷を積みおろしをした地域ともいわれております。さらにその先、北街道の右手静岡市立高校の正門には、西草深町の旧徳川家達邸から移築された**「田安門」**が保存されていますし、左手**「蓮永寺」**には、家康公の側室「お万の方」の供養塔や、勝海舟の実母や佐久間象

山の妻「じゅん」のお墓があります。

・・・ここから先、銭座・横内・水落と続いて駿府のお城に到着します。

話は清水区を中心にするつもりでしたが、つつい静岡（駿府）の町に入ってしまった。・・・ゴメンナサイ、改めて清水の町のことに戻ります。

19 前後してしまいますが、興津の分岐点R52号線・「身延往還路」

「甲州道」を北へ進んだ次の集落「小島」（おじま）

9項で少し触れていますが、この集落について改めて触れます。

興津の承元寺を大きくカーブして、その入り口の集落が「小島本町」。その先興津川が再度大きく曲がり、「小島中学校」がある地域は「**但沼**」（ただぬま）となります。

興津川の右側向こう岸「**立花**」（たちばな）と呼ばれる地域は、この峠を越え、浜石岳の下をぬけると、由比の集落「町屋原」への近道になります。というより、その昔由比の海岸で獲れた海産物を荷にして、この道を通って甲州など山岳地域の人々に運んだという話があります。「但沼」はこの集散地だったそうです。

興津川は但沼橋から左に曲がった流れを指し、その先は清地（きよじ）・和田島・茂野島（しげのしま）。右手は「中河内」。

この地域の中学校の校名は「両河内中学校」といいますが、「両河内」という地名はありませんのでご注意ください。中河内と小河内を合わせて「両河内」になります。国道は、ルート75・195・196号線になります。

・・・大きなトックリが目に入り、頭上には、新東名道が通行しています。

「清地」は、先の庵原の奥から、峠を越えて下った集落となり、興津川の流域でのキャンプやバーベキューなどで人気がありますが、マナーを守らない人が増え、地元ではいささか閉口しているとのこと。この地域でもフォッサマグナの痕跡が見つかっています。

さらにその左手の上流の地域は、「やませみの湯」や「たけのこ」「笑味の家」「森林公園」などにより、近年名が知られるようになりました「**西里**」（にしさと）になります。

但沼より、右手のルート52号線を進み「小河内」。その先の富士見峠の先には、富士川沿いの「芝川」の集落へ下る道もあります。そして最高点の地域が、

宍原（ししはら）。山梨県との県境になります。

・・・歩くには、かなりの距離になりますし、公共の交通機関（バス）の運行は但沼までです。加えてJR興津駅からの路線バスは、1時間に1本のダイヤですから、綿密なプランをお立てください。・・・

ここで遡りますが、入り口の「小島」について、少し触れてみます。

最初の集落「栗原」（くりはら）のバス停・信号機の左手に「龍津寺」（りょうしんじ）があります。Tel. 054-393-3028

事前に申し込みをすればご住職からお話を伺うこともできます。但し、お寺さんですから、仏事と重なればそちらが優先されることはご理解ください。

小島藩主三代目昌信のお墓や市の指定文化財や保存樹木などの見学ができます。

そして つぎの信号機より左手の山沿いが、1704年、藩主1万石の松平信治が築いた、160年余前の「小島陣屋」の跡地になります。

この小島の陣屋跡は、「日本三大陣屋」のひとつともいわれており、考古学や埋蔵文化財に関心をお持ちの方は必見との思いでご紹介いたします。

但し、この陣屋跡は史跡指定を受けており、さらにその周囲は、私有地となりますから、勝手に立ち入ることは厳に謹んでください。

小島では、「文化財を守る会」がガイドをすることができますから、つぎの方を通して事前にお申し込みをしてからお訪ねください。

渡辺 唯義（小島モータース）TEL. 054-393-2012

・・・「陣屋」（じんや）・・・一般には、3万石以下の大名が構えた行政・居住用の藩主の屋敷とその敷地や堀などの構造物も含まれます。
いいかえれば、お城と同等の敷地・建物ということになります。

この龍津寺や陣屋跡の先には、由緒ある「酒瓶神社」「庚申堂」などを立ち寄り、かつての「身延古道」を歩き、その先下の方を走る52号線の道になりますが、小島本町には、藩主の書院だった建物が、「小島公民館」として移築・利用され、当時の姿を伝えています。但沼は、もう少し上の集落になります。

サイクリングを満喫しようと計画しておられる方々や身延往還路を散策される方へ「**小島への推薦ルート**」のご紹介をいたします。

52号線は大型のトラックが数多く走行しますので危険窮まりません。といって、興津「石塔寺跡」からの古道「身延路」を走行することは、かなり道が狭いのであまりお勧めできません。ゆっくり家すじを觀賞するには、東名道を

越えた「八木間」あたりまでは多少良いかもしれませんが、次の新幹線を越える「谷津」で、再び交通量の多い52号線と合流してしまいます。

そこで、次の道をご紹介します。

△ 歩いて**散策**を予定される方には

興津中学校の正門前から水道山の下を通過して、そのまま山すその道を進みますと「谷津」・・・横山城の下まで行けます。ここから52号線へ戻り、承元寺・小島へと進むことができます。但し、このルートは、自転車には少し道幅が狭いと思います。

△ 秘密の**自転車用の爽快なルート**をご紹介します。

R52号線の入り口からJRの陸橋を越えて坂を下ると、左手「興津螺旋の工場の先に「押しボタン式の信号」があります。この信号を右折、薩埵峠の方向に進みますと興津川の堤防にぶつかります。実はこの堤防の上が「**遊歩道・サイクリング道**」としてすばらしいのです。

川面からは、冷たい風が頬を撫ぜ、それぞれの興津川を越える鉄橋のある交差点以外全く自動車の心配がありません。季節には、興津川を泳ぐ「鮎」を見ることもできる道ですし、途中、川を越えた集落「井上」などへも立寄ることもできます。自転車でノンストップですと、承元寺・小島まで、上りで30分程度です。

以上、富士川から蒲原・由比・興津と西進してきましたが、このルートを振り返ってみますと、海岸沿い、進行方向右手には山が接近。そして所々に、断層崖が見え、それぞれの境界には大きな雨の時には、とても水量の多くなる川が存在する地域が続いておりました。そして薩埵峠を越えると、かなり大きな興津川（古い書物では、浦安川とも表現しております。）を渡り、興津からは、北部方面への道、甲州道（身延往還路）の分岐点のことも触れました。

しかし、庵原川の流域、袖師・庵原あたりから、山がかなり遠くになり、巴川流域の平地の地域（清水平野）となりました。さらに西へ進むと、今度は、日本平・久能山のある比較的低い山「有度山」が南側に見られるようになります。このように 広域的に地形をしてみるのも一考ではないでしょうか。

20 江尻

そろそろまとめの段階になりますが、そこでひとつ考えてみてください。

そもそも「**江尻**」という呼称の町が、なぜ「清水」（しみず）に変わったので

しょうか。この答えが「**清水の町**」の歴史をひとことで語ってくれるものと考えてはいかがでしょうか。

今般の蒲原・由比との合併以前の「清水」について限りがありますが、まとめに変えて少し時間をいただきます。

まず最初は、「**清い水**」(きよいみず)

・・・爽やかな水に関わる町をイメージできませんか？

ちなみに「**静岡**」という呼称は、廃藩置県の際「**賤ヶ丘**」(しずがおか)を語源にして、**賤岡**(しずおか)から生まれたといわれているそうです。

町の南側は、清水湊(港)。そして、町の中央に流れのゆったりとした水量の多い「**巴川**」が、北側の山の裾を通過して駿府(静岡)の町まで続いています。

古い地図によると、現在のJR清水駅から、静岡鉄道の電車、新清水駅(昔は相生町と言った。)さらには清水区役所・路面電車の終点(折り返し点)港橋の一带は、海の中だったといわれています。

町の呼称には、その昔の姿を言い表す箇所があるとよく言われますが、JR清水駅の海側(東南)の一带は「**島崎町**」。駅のすぐそばには「**仲浜町**」という町名があります。「**島の先**」先端部分や「**真ん中の浜**」の部分(中洲)と解釈できませんか？。

清水区役所のある地域から波止場の一带は、古地図によると「**向島**」(むこうじま)と記されています。「**島**」という表現から考えると、その手前、現在の巴川とバス通りを隔てて「**向うの島**」をイメージできますネ。

さらに、清水の町といえば、浪曲ですっかり名を馳せた「**清水の次郎長**」を忘れることもできません。任侠の世界の「次郎長親分」子分の大政・小政の世界のことはさておき、時代が明治になってから、政府から「**街道警固役**」に任命され、それ以後は清水港の整備・横浜との定期航路の開発に力を注ぎ、一方英語教育を奨励。日本初の英語塾を1886年(明治19年)その船宿「**末廣**」で開き、以来、海軍士官候補生の定宿となったのです。

「**港橋**」には、この「**末廣**」という次郎長の「船宿」を復元して、その歴史を知ることのできる施設があります。・・・入館料無料 月曜日休館

是非、お立ち寄りください。駐車場は波止場周辺の駐車場利用(有料)。

そして、戊辰戦争で亡くなった「**咸臨丸**」の戦士の遺体を手厚く葬った「**壮士の墓**」。さらに「**次郎長の生家**」は、「次郎長通り」という商店街の一角にあり2017年リニューアルされてご来館をお待ちしております。(入場無料)また、少し西側のゆるやかな坂を登ると、次郎長の菩提寺「**梅蔭禅寺**」があり資料館(有料)も併置してあります。

この次郎長のことだけではなく、この周辺には「**鈴与**」・「**天野廻漕店**」などという大きな会社がありますが、かつての「**廻船問屋**」が集まっていた「**蔵町**」

です。港橋の向こう岸、右側の袂の「鈴木さん」の家構えからスタートして「本町」の周辺で、「北村家」などの蔵を味わうことができます。港橋を渡る手前、バスの停留所の後ろの川沿いには、「甲州廻米置き場跡」の石碑もあります。

一方、これらの港や海運の歴史を展示してある施設として

「フェルケール博物館」という施設もあります。(有料) 駐車場有り

・・・「フェルケール」って何語？ どういう意味？

立寄っていただければ一目瞭然。駐車場もあります。

もちろん潮風を味わうには、埠頭で、かもめが飛び交う姿が堪能できますし、ここからの富士山は絶景です。

観覧車や数多くの飲食店街の集まっている「ドリームプラザ」でのお買い物はいかがですか。寿司横丁では、新鮮なネタのお寿司が堪能できます。

・・・少し大食家の方には、JR清水駅の海側にある「河岸の市」が適当かもしれませんネ。ここでは、主婦の方には、新鮮なお魚を格安でお買い求めすることもできます。

また、湾内の観光船や伊豆土肥までの駿河湾をおよそ60分余で横断する「駿河湾フェリー」。このフェリーの航路を、県道223（ふじさん）と呼んで航行しています。マイカーでジオラマの西海岸見学・松崎や黄金岬で愛を語るなどのドライブを計画されるのも良いかもしれませんネ。「なめこ壁の町・松崎町」方面の人たちは、マイカーをフェリーに乗船させて、清水・静岡への生活道路としての利用もされております。・・・2018年5月、燃費の高騰などの理由から運行停止の話が挙がり、地元ではびっくりしています。

21 三保

さらにもうひとつのルート。路線バスの他に「湾内観光船」を利用して、今もシーズンには多くの賑わいを見せる「三保海水浴場」まで乗船すると、東海大学の水族館や「三保の古道」を散策するコースもあります。

「三保」といえば「三保の松原」・・・富士山の「世界文化構成遺産」として認められましたが、三保海水浴場（真崎・まさき）から半島の先端を、富士山をやや後ろ（左手）に見ながら砂浜を歩いて、歴史ある灯台などを見上げながら、この松原の南側太平洋側のコースを進むと「羽衣の松」に到着する逆進のコースになりますが お勧めのコースです。

あるいは、内海側「三保街道」と呼んでいる、バスの走行する広い道の内側に、その歴史を感じさせる「三保の古道」もあります。

ここで、ちょっと観光から離れて是非「三保」の人々のことで知っていただきたいことに触れます。

土地は、砂地ですから米作に適していないことは自明のところですが、では、ここ三保の人たちは、どのような生活をしていたのでしょうか？。

ひとつは、海岸沿いですから海産物を採集していたことはすぐに解りますが、古くから、さつまいも・大豆・茄子などの栽培にも力を入れていたといわれています。農業を営む人々の苦労がうかがえます。

そしてもうひとつは、このように苦労した人々のなかには、ハワイ・アメリカ西海岸への移民をした人たちが大勢いたということです。しかし太平洋戦争が始まると帰国することが困難になり、アメリカの日本人収容所で生活をしなければならなかった人たちが大勢いたことも忘れることはできません。

一方、内海（うちうみ）の静かな海岸線を利用して、「清水高等商船学校」・・・「海軍と商船」の歴史・・・を語ることもできる所です。太平洋戦争の後には「東京商船大学」と変わりましたが、現在の「東海大学翔洋高校」の正門の前にその石跡を見ることができます。

明治33年（1900年）商船学校の練習船「月島丸」が、駿河湾で遭難。多くの学生が亡くなりましたが、その供養祭が「清見寺」で執り行われ、現在も清見寺にはその後創られた「供養」の版が掲示されています。

また、内海側の古道を歩くと、かつての三保の人々の生活をイメージさせてくれる町筋や古民家も残っております。また、造船業界で大きくリードしていた当時の姿も見ることができます。

そして、その古道の先（西側）半島の付け根「折戸」（おりど）・「駒越」（こまごえ）あたりからは、かなり整備され 歩行者と自転車の優先道をみることもできます。これはかつて貨物の輸送に活躍した「**清水港線**」（通称**三保線**）の**線路跡**になります。そのまま北へ向って進むと、巴川の河口をとおり、清水区役所のすぐ脇まで優先道は続いています。自転車も可。散歩・ウォーキング・ジョギングにもベストなコースです。

さらに「三保の松原」の話としては、「羽衣の松」の他に「**エレーヌの碑**」が建てられているという話をつけ加えます。1952年（昭和27年）のことです。フランスの舞踊家エレーヌ・ジュグラリスは、能「羽衣」に憧れ、その思いを受けて建てられたものです。

・・・「**羽衣伝説**」は、外国人にも伝わり理解されているのですね。

羽衣の松からちょっと離れていますが、探してみてください。

22 久能山

一方、この駒越から海岸沿いを西へ進むと、「石垣いちご」のハウスが目につきます。かつてより「石垣いちご」や「露地のハウス」の数からは、かなり少なくなりましたが、12月になると、早々このハウスの中では、真っ赤な「いちご」を見ることができます。

そして、あと少し進むと「久能山」の入り口になります。

久能山東照宮・・・徳川家康のお墓があることは有名ですが、1159段の階段を登る楽しさも味わえます。そして、その途中には、いくつかの武田勢が城を築いた当時の史跡もみることができます。

1159段の石段・・・「本当にそんなにあるの？」といいながら、何人かの人はいながら登っていますが、途中息切れしたりして正確な数は人によりさまざまのようですネ。

こんなに歩くのは どうも？という方は 日本平までバスに乗りそこからロープウェイを利用するコースもあります。

23 久能道

その手前、迎山町から忠霊塔に立寄った後、有度山沿いに北の方向への道は、日本平への登山道や、今ではサッカーの専用グラウンド・市立病院、そして、由緒ある「鉄舟寺」・「龍華寺」などを経由する「久能道」と呼ばれる古道へと続きます。

この道は、かなり小高い所を通行しますから、マイカーでも車窓から三保湾・富士山を眼下にした絶景が楽しめます。

ここでは、昔から観光施設として多くの人たちを迎えた「お寺」について触れてみます。

最初は「龍華寺」(りゅうげじ)です。

山門を入ると目の前に大きな蘇鉄(そてつ)が目に入ります。その脇の階段を登ると「高山樗牛」(ちよぎゅう)のお墓があります。手を合わせてから振り返っていただくと、すばらしい景観が正面に見えます。樗牛の遺志だったのでしょうか。うらやましい位すばらしい場所に墓地があります。お寺の奥のほうには、資料館もあります。故人を偲んではいかがでしょうか。

次は、「**鉄舟寺**」(てっしゅうじ)です。

正確には、**補陀洛山「鉄舟禅寺**」と呼んでいます。江戸城の無血開城に力を注いだ「**山岡鉄舟**」のゆかりのお寺です。清水の次郎長と鉄舟により、その再興がされたといわれています。

では、この再興とは、どういうことなのでしょう。

このお寺は、そもそも「久能寺」といわれていました。徳川家康により久能山にあったお寺が移されたのですが、明治になって廃仏毀釈により廃寺となったお寺を、「樗牛」と「鉄舟」の二人は再興したのです。そして、昭和40年近くになって改めて整理をすると、なんと！そこからは、現在は国宝となっている「久能寺経」や「義経の薄墨の笛」とその「添え状」等などが見つかったのです。本堂は、前に北街道のところで触れた「高源寺」に移築されました。

久能山への石段・三保の松原・龍華寺・鉄舟禅寺などは、日本平のロープウェイが通行され、静岡からのパークウェイが開通するまでは、市内遊覧観光の指定コースとして、多くの人々の訪問をいただいております。

この久能道からは少し離れてしましますが、鉄舟寺の山門の前に中学校があり、そこを海の方へ下って「日立」の工場を過ぎたあたり、海岸沿いの広い道へ出る少し手前の右側(南)に、かつてはかなり広い敷地でしたが、「**海長寺**」という日蓮宗の清水区の本山があります。

・・・書物によれば「海上寺」と記録されているものもあるようですが・・・
 ここには、貴重な話が伝えられています。

それは、徳川家康が武田勢に攻められた時、その家康が身を隠したといわれる「椿」の大木が残っています。そして、このお寺は、このことから「葵のご紋」の使用が認められたということです。 エッ？本当の話？

久能道

現在はかなり拡幅されており、かつての「古道」を散策することはできませんが、そのまま山すその広い道を北側へ進んでください。「船越」「馬走」(まばせ)という地域になり、大きな貯水池「船越堤」。そして、静岡鉄道の電車やJRの姿が見え始め、さらに南幹線を横断すると「上原」。今は大きなスーパーの敷地になってしまいましたが、「**狐ヶ崎遊園地**」があったところです。ここで「追分」(おいわけ)前に触れた「**志ミづ道**」と合流することになります。

ところで、有度山の頂上を「**日本平**」(にほんだいら)と呼んでいます。標高は307メートル。何時？どうして？こんな大きな名前がつけられたのでしょうか？その歴史は、大正時代に遡ります。

・・・ここでクイズ。この「日本」という語を使用している地名
 いくつご存知ですか？答えは数行先にあります。

天候に恵まれれば、東正面に「富士山」。そして眼下には「三保の松原」と「清水港」。遠くには「伊豆の山々」。北側には「南アルプス」。さらに西側は「駿府の町」から「用宗」（もちむね）・・・昔は、持舟と表記・・・大崩（おおくずれ）海岸から丸子・宇津ノ谷峠とぐるり周回できる景勝地です。そして、日本平には、「野口雨情」が作詞した童謡「赤い靴はいてた女の子」の像もあります。

クイズの答えは「日本橋」「日本坂」そして、ここ「日本平」です。

24 特別編 バイコロジー（自転車）による走行の方のために！

すでに、文中で、いくつかのコースや諸注意を記してきましたが、ここで改めて、いくつかの「1日走行コース」を想定してまとめてみました。

俗に呼ばれている「下道」（したみち）かつての国道は、バイパスの通行により、かなりその車の走行数は少なくなりましたので、その「下道」を走行する人たちがかなり多いように思います。しかし、一部バイパスの通行ができないということで、「横」に追いやられている傾向は免れませんが、特に興津川から由比までのコース**薩埵・山下海岸線は「通行不能」**となっています。

一方通行可能な路線も、自動車とりわけ貨物輸送のための大型車が多くなり、その危険も免れません。加えて自転車の性能の向上により、軽量化とともにスピードもアップしております。

くれぐれも交通安全を願うことは言うまでもありませんが、コースの選択に多少の研究をしていただければ、その楽しみはより倍増するものと考え、すでにご承知のこととは推察しますが、いくつかのコースを列挙いたしてみました。

1 由比・興津川間「薩埵・山下海岸」コース

文中にも触れておりますが、由比駅へ入る立体交差の地点から興津川の西岸健康ランドの間は、バイパスの海側に、かつて桜えびの乾燥場所としていた幅2mほどを「**専用道**」として通行するようにしてあります。

途中からの出入りは、東倉沢・西倉沢の信号を利用すること。特に東向きの走行の場合は、バイパスの途中での横断は絶対やめてください。

2 「興津のまち中」の走行コース

興津のまち中は、それほどの車両の通行はありませんが、52号線西側宗像神社入り口の海側に「商工会」の建物がありますが、ここから「浜道」を通行するのも、ひとつ味わいのあるコースとお勧めします。

但し、道の舗装がかなり昔のままのデコボコ道になります。走行右手には、

昔からの「石積み」。反対左手には、コンクリートによる防波堤の間を走行することになります。そして、海側は公園となっており休息にはもってこいのコースです。・・・途中何箇所かにトイレもあります。

但し、途中気をつける箇所は、4箇所あります。

- ・ バイパスから興津駅へ入る所
公園の歩行者用の横断歩道橋のあるところ。
- ・ スーパー・マックスバリュの裏、「袖師臨湾道路」との交差点
興津学習交流館前を通り、幼稚園のすぐ先、マックスバリュの裏手。急な下り坂を下った所です。

このすぐ手前の親水公園の上には「展望台」もあります。天候にめぐまれば、三保の松原・伊豆の連山、そして、富士山と絶景が楽しめる展望台です。公衆トイレもきれいです。

このすぐ西側の急な下り坂の下は、旧、国道から「袖師臨湾道路」（マリンロード）へコースを変える自動車がかかり通行しますのでもともと危険な箇所といえます。

- ・ その先、広い公園の先が「清見寺の入り口」
ここは、かなりトラックの通行がありますので、要注意！。
左手角には「皇太子海水浴記念碑」や正岡子規のための「小公園」
- ・ 最後4箇所目は、「浜道の終点」波多打川の堤防脇
左手の植え込みの中に井上馨侯の坐像が鎮座しています。2月になると、興津の名物「寒さくら」を手に触ることの高さで咲き誇ります。

テニスコートの脇には、11月から12月には、ほんのわずかですが「冬さくら」あるいは「秋さくら」ともいわれますが、小さな可憐な花を咲かせます。

ここから国道へは、波多打川の脇のガードレールの間を通行して「横砂橋」を登るか、バイパスの下で、そのまま正面の細い道を通り、正面の三叉路を右手に進んで、JRの踏切を横断すれば、その先で国道と合流します。

一方、昔の横砂の海水浴場の走行を希望する人は、正面の三叉路を左手。そしてすぐ右手（海側）へ進めば、石積みの場所に出られます。行き過ぎたらその先は、「**臨湾道路**」（マリンロード）になります。

3 2の箇所で「**臨港道**」（マリンロード）という表現を何回か使いましたが、正式には国道149号線と言うそうですが、地元の方は、この表

現をあまり使用したことがありませんけれどネ……。かつての「清見潟」を埋め立て、興津埠頭の貨物を運搬する道です。頭の上にはバイパスが通っています。

潮風を頬に受けて、爽快に走行できる道としてご紹介したいのですが、前に記しましたが、興津・袖師の埠頭の貨物の輸送路ですから、かなり大型のトレーラーの横を走るようになりますのでくれぐれもご注意ください。

そのまま走ると、東名清水ICへの取り付け道・JR清水駅の東口・魚河岸・ドリームプラザ・日の出埠頭・巴川口・清開・駒越・三保・久能山へと続く「150線」となります。

- ・ 清水駅前のストックトン橋は、やはり通行できませんから、魚河岸の側を通行。すこし込み入った道を通り抜けると、島崎町というところから、かつての三保線の跡の「専用道」となります。
- ・ 清水駅前のストックトン橋を上らず、信号を右折、JR清水駅方面へ進みマリナートを左折、線路沿いを島崎町の信号からもう少し進むと清水区役所の庁舎脇に進めます。
- ・ ドリームプラザ・日の出埠頭の一帯で、やはり走行にご注意いただきますと、その先 巴川口～駒越～三保～久能山へは一気に走れます。三保の松原入り口あたりまで、およそ30分前後。
- ・ 右手、有度山・日本平方面に向かう人は、清開3丁目の信号・日立の工場方面に向かうと、龍華寺・鉄舟寺の正面になります。
- ・ 久能山方面に向かう人は、駒越の三叉路を右手に進んでください。150号線です。この先はまさに砂浜を走行するような思いのできる海岸線。そして季節になれば、ハウスの中で「石垣いちご」が楽しめます。
- ・ 久能山では、1159段の階段を上り下りした後、途中、久能山の先「有度山」の西側、静岡大学・小鹿方面の北へ進みたい人は、「大谷街道」「久能街道」を北進。JR静岡駅の南口・登呂遺跡方面を目指す人は、「石田街道」を北進します。
- ・ そのまま西進。東名静岡ICを越えて安倍川を横断すると、広野・用宗（もちむね）を通過して「大崩海岸」（おおくずれ）へと続きます。かつての狭い街道も残っていますが、駒越から久能山下・下島・西島・中島・安倍川の東岸までは、新しい道が整備され、海岸線の潮風を受けて爽やかな走行のできるコースです。

4 興津に戻ります。興津川を上る**52号線・「身延往還路」**コース

52号線を上るコースの他に、やや狭い道になりますが、石塔寺跡から「身延路」を上るコース、そして興津川の西側の堤防を走行するコースの3路線を9項や19項でご紹介しましたが、いずれも「小島」まで。その先は、山すそを走行する古ながらの道になります。

5 「いほはら」(庵原)コース

旧国道から、もっとも古い道や奥の方面（伊佐布・吉原）方面への走行しようとする、かなり難解。

地図で充分下調べしてからにしてください。

最も平易なご案内になりますが、バイパスでは「尾羽」という箇所を横断して庵原の地区へ入るか、東名ICの東、庵原・千日原の交差点（JA）で入るか。この2箇所が解りやすいと思います。

それは、この地域は、東名高速道やバイパスの建設により大きく変化したのですが、さらに今般 新東名のジャンクションの建設により、昔ながらの道がかなり補修・拡張され大きく変化しているからです。

6 飯田・高部の「北街道」のコース

昔ながらの道は、辻町の「秋葉神社」脇、清水東高校の裏手から高橋・高源寺前・天王町を通行するのですが、自転車では、バイパスIC西の交差点からバイパスの下道（側道）が最も解りやすいかもしれません。

かつての北街道も、天王町の交差点から高部方面には新しい道が通りましたので、静岡と清水の市境の西奈・瀬名までは、かなり通行しやすくなったと思います。

7 バイパス走行について

いわゆる「下道」に対して、当地はバイパスが敷設され、その利用が盛んとなっていますが、現在の道交法では、残念ながら自転車の走行は認められておりません。

高架化されている箇所については、はっきりその区別が付きませんが、いわゆる「平地」の場合、その混同が目立つようです。

ここで、特に**薩埵（山下海岸）、興津川より由比駅の間**について、再度補足いたします。

興津52号線の交差点の東、**興津川を渡る箇所**についてです。

興津川の橋のたもとに「**通行不可**」の交通標識がありますが、あまりにも目立ちませんネ。

***** 間違って、バイパスへ入ってしまった人！*****

*** 東から西向き（下り車線）走行の人**

多くは、由比の駅からバイパスへ入ってしまった人が多いと思いますが、山下海岸の手前、東名道の高架下手前の左手に、立ち食いそば店の前でサイクリング専用道へ変更してください。興津川を越えて、健康ランドの前まで専用道の走行ができます。ここで、国道52号線の交差点へ出て、下道を走行してください。

*** 西から東向き（上り車線）走行の人**

52号線の交差点の一寸先、バイパスを潜って健康ランドの前から、サイクリング専用道を走行、興津川の鉄橋を渡ります。

信号の先、三叉路のGSを左に進み、浦安橋（古い興津川橋）を越えて、岩城人形屋前を左折、JRの鉄橋の下を潜って川沿いを上って、薩埵道へ進みます。

峠を越えて、由比まで進もうとする人は、東名道の側道を上ることになります。かなり険しいですが、自転車で走行する道はここだけになります。

もし仮に、人形屋の前をそのまま走行してしまった人！

JRのトンネルの少し手前、左手の警報機の踏み切りでUターン。

興津川の鉄橋の下を潜って、川沿いに上って（上の文）峠越えをしてください。

*** 峠越えはしないけど、由比・蒲原方面を目指している人！**

もう少し戻って、52号線の交差点手前（東側）県営団地入り口の信号を渡って、バイパスの下を潜り、健康ランドの前から、興津川橋を越えて「自転車専用道」を走行してください。但し、由比駅へ入る交差点までです。この交差点で由比駅方面に進み、そのまま東向きに進むと、蒲原・富士川へと進み、富士川の鉄橋を越えて富士市街地に入ります。

なお、興津の町中ですが、昔ながらの狭い車道ですから、歩道の走行も許されています。2列以上の併行する人は見かけませんが、バイパスを走行している人の中には、軽量の細いタイヤの自転車の場合、横を通り過ぎる箱型のトラックの風圧で、ハンドルを取られている人をしばしば見かけます。くれぐれもバイパスの走行はやめて、多少不便でも、爽快な自転車の旅をされますよう希望いたします。

8 興津から「清水駅東口、三保方面」のコース

興津清見寺のすぐ東側、スーパー「マックスバリュ」の信号から海に向かいバイパスの下を通る道、通称「臨港道路」とも呼ばれていますが「149号線」。そしてJR清水駅から「150号線」、三保の根っこ

「駒越」から久能山下を通り、安倍川を渡って、用宗・大崩海岸までの海岸道は、潮風を頬に受けて爽やかなツーリングが楽しめます。但し、気をつけることは、港のコンテナなどトレーラーの走行が多いこと。

途中、少しややこしいところは、JR清水駅の東側、東亜燃料（現在の呼称JXTGエネルギー(株)清水油槽所）のタンクを通り越したら、右手JR清水駅への入り口、マリナート手前の信号から「ストックトン橋」へは絶対に上らないこと。

橋の上り口の左側「河岸の市」の前を通って、少し入り組んでいます。が、正面、島崎町から自転車優先道に入れます。

また、マリナートの信号を西向きで右折、線路脇を左に進んで、島崎町の信号、その左手から優先道へ入れます。もし島崎町の入り口がわかり難かったら、そのまま進んで、区役所の脇交番の脇から「優先道」へ入ることもできます。

町なか、港橋・南幹線・新清水駅方面は、走行右手、立体交差路の「清水橋」の脇から「さつき通り」「巴川」沿いへ出ると解りやすいです。この「清水橋」も、自転車の走行はできませんのでご注意ください！

静岡方面への道「南幹線」は、清水区役所前の交差点を西進。

清水銀行のある交差点は、万世橋・甘味処「舟橋舎」を西進。

大きな石垣の脇を走行して、交差点の先、右手には桜が丘病院、左手には岡小学校・二中。さらにその先には清水西高校を通して、大沢川を越えて船越の地域になります。

9 結びとして

自転車の方々には、古い道や途中の立ち寄り先については、走行路から離れてしまう箇所が多いので、それぞれ事前に調査され、休憩しながらの見学をお勧めいたします。

そして、なによりご注意くださいことは、交通ルールの遵守と安全には、お心を配っていただきたいと願います。

特別編

ここまで清水区を中心に書き連ねてきましたが、最後に「特別資料」として、周辺の地域のこと・特徴的なことについても書き添えさせていただきました。

その1 富士川を東へ越えた「富士市」以東

冒頭で「富士川」の東、現富士市は、その川岸の「雁堤」については触れましたが、さらにその東側について触れてみます。但し、方位の表記は「東向き」の表現になりますのでご注意ください。

富士川橋を越えそのまま東へ進みますと、身延線のガード「柚木」(ゆのき)駅になります。

ここから富士宮方面に向かう人

この駅から身延線の各駅停車の電車に乗車すれば、15分ほどで富士宮に到着します。運行は、1時間に2本平均です。

さらに「東海道」を東に向かう人

東海道は「札の辻跡」・「本市場」・「塔の木」を通り東へ進みます。この一帯が「間宿、本市場」になります。

ここで「JR富士駅」に向かう人

「平垣」右折(南向き)商店街を抜けた正面が「JR富士駅」になります。

そのまま さらに東へ向かう人。

かなり道幅が広くなり、その周辺は昔の面影が感じられませんが、そのまま「潤井川」(うるいがわ)に架かる「富安橋」を目指してください。

* 一口メモ *

富安橋のことを、地元の人たちの間では「三度橋」と呼ぶ人もいるとか？三度？どういう意味？江戸と京都を行き来した飛脚は、1ヶ月に3度この橋を渡ったことから命名されたと聞いています。

橋の東側「高島」の交差点で左に曲がりますと、その先に「西木戸」。

その先が「吉原宿」になります。商店街が、吉原本町。富士山は、東向きですと左手の方向になります。そのまましばらく進むと「岳南鉄道」「吉原本町」の駅です。

この岳南鉄道のクラシックな車両もなかなか風情があります。運行は、朝夕

が主体ですから、昼間の運行本数は少なくなります。JR吉原駅・・・昔の鈴川・・・まで2駅です。

ここ「吉原本町」から、さらに東へ進む人。

目標は、比奈（ひな）・「県立吉原商業高校」。左手の東名高速道の向うには、富士山が目の前に迫って見えます。（県道22号線）。さらに東へ進んで、岳南鉄道富士岡駅の富士山側に「湧水公園」があります。この周辺には、富士山からの湧水の公園がいくつかありますが、ここは「**医王寺**」に続く参道が公園の一部になっており、池の底まで見えるほど透明度が高く、鯉の泳いでいるのがよく見えます。そして、岳南鉄道の終点（折り返し点）の「**江尾**」（えお）で、新幹線と交差。

・・・この**岳南鉄道（電車）**は、太平洋戦争終結間もない時に開業。

2018年には創業70年となります。何故、この鉄道が敷設・運行されたのでしょうか考えてみてはいかがでしょうか・・・

話は戻して、この界限では、蒲原と同じように数多くの神社や寺院が、沼津市との市境まで続きます。・・・何を意味しているのでしょうか？・・・

沼津市に入ると、道はやや南下。東名道とは離れてゆきますが、新幹線とは、併行するように進みます。沼津駅の北側、西熊堂・東熊堂の先は、御殿場線の「下土狩」（しもとかり）駅の近くの県道87号線へと続きます。

この次ページに書いてあります元吉原（旧、鈴川）から沼津狩野川の河口へと進む「千本松原」沿いの海岸線に対して、この山道は、どのような役割を果たしていたのでしょうか？

吉原本町から南方向へ歩く人。

平維盛が富士川の西岸、源頼朝が東岸に陣を構えた「**源平の富士川の合戦**」の話に、『大群の水鳥が一斉に飛び立ち、それに驚いた平家軍が逃げてしまった（？）』という有名な話の「平家越の碑」あたりから南向きに進むこととなります。・・・この一帯が、所替えをした「**中吉原**」。

そして、街道を歩きながら富士山を探してみると、なんと今までと反対側に見える地域があります。・・・東の方から西へ進んだ場合、富士山はずっと右側に見えていたのに、この地域だけ反対に見えるということから「**左富士**」と名づけられました。

その先が「依田橋」です。新幹線・R1バイパスと交差する地域です。正面に海も見えます。「田子の浦港」です。そして、JRも見えるようになりました。

あと、少し！

J R 吉原駅前に到着。周辺は、かなり道路が拡げられているので方向に注意。駅を過ぎ、東側の「鈴川踏切」でJ Rを越えると「松林」が始まります。この一帯が「元吉原」。・・・田子の浦の港は、少し後ろ（西）になります。そのまま松林を右手（東）へ進むと、旧暦の正月7日～9日に開催される「だるま市」で有名な「毘沙門」さんです。ここは「妙法寺」というお寺なのですが、中国様式の建物がある独特な雰囲気を持つお寺です。

・・・ここまで、富士川東岸「雁堤」「雁公園」から、立寄りをせずにひたすら歩いて2時間前後かな？・・・

この先、J Rの駅ですと「東田子の浦」・「原」・「片浜」と続いて、最後「千本浜公園」「若山牧水の歌碑」などを経て、沼津狩野川の河口「我入道の渡し」（がにゅうどう）まで、やはり2時間位かな？休憩を挟んでも3時間かな？

J R沼津駅（沼津宿）へは、この狩野川をそのまま上流に向かってください。

このコースを、今一度振り返ってみます。

中吉原で、大群の水鳥が飛び立った「平家越」のことを触れましたが、このルートには、いくつもの大小の川がありました。そして、左手には、富士山、右手は、千本松原の旧国道（東海道）。そして、バイパスのルート一帯は「浮島」という地名があるように「湿地帯」だったのです。

ですから、元吉原の海岸線を通行しないで東へ向かおうとすると、吉原宿から岳南鉄道に沿って富士山の麓を進むコースが考えられます。

このルートについても散策してみる価値はあるのではないのでしょうか。

以上、富士・吉原から沼津までについて触れてみました。

その2 府中・駿府と呼んでいる旧静岡市内

現在J R静岡駅・市役所や県庁の所在する駿府城・浅間神社などを中心に、J Rの線路を挟んで、北側を葵区、南側と安倍川の西側を駿河区と区分されていますが、廃藩置県の際の「賤ヶ丘」を語源として「静岡」として命名されたこの町が、どのような過程で構成されていったのかをおおまかにまとめてみました。

東側清水（江尻）から、J R・国道沿いに駿府の街に入るコースが一般的ですが、今まで触れてきたように、ひとつは、古道・鎌倉街道、現在では「北街道」と呼んでいる**北側の山の裾・巴川の流域を通るコース**と、有度山・日本平の北側を通る、大化の改新後には、駅伝制が制定されたといわれる、現在の「**南幹線**」のコース、そして**海岸道**について書き出してみました。

そのひとつ目は、

「駿府城」を中心にした町となっていますが、実際には見ることはできませんが、その町なかの「地下」の様子について触れてみます。

家康公は、江戸へお城を築く前に、ここ駿府で、そのミニチュア版の街づくりをしたとの説がありますが、静岡の町なかには、今は「暗渠」（あんきょ）となっていますが、「安倍川」の支流が何本も流れているのです。

その最もはっきりしている所は、浅間神社の左手（西側）のちょっと上「材木町」。その上「籠上」（籠上）（かごうえ）という地域に「薩摩土手」と呼んでいる堤防が残っています。

この土手は読んで字のごとく「薩摩」（鹿児島）藩に請け負わせて築いた堤防です。浅間神社の山すそに流れ込んで、材木の引渡しをしたらろう「材木町」から上流の安倍川の流れを、西側（現在の流れ）に変えるための堤防なのです。この堤防の西側には「水道町」という呼称の地域もあります。

材木町の謂れは、安倍川の上流で切り出された材木を、筏（いかだ）で下ってきてこの一帯で陸に上げたとの説もあります。

薩摩藩に関しては、駿府城の敷地の一部、現在の「裁判所」がある一帯には「薩摩屋敷」があったといわれています。

・・・清見寺に建立されている「琉球王子」（具志頭王子）は ここ薩摩屋敷で亡くなったとの説があります。・・・

さらに驚くことは「浅間神社」の名前を出しましたが、この山を「賤機山」（しずはたやま）といいますが、正面南側から見ますと、左（西）側が「安西」「籠上」の地域。当然のことですが、川の流れは上流から南へ流れています。しかし右（東）側、赤い鳥居から右手のコンクリートの通称「石鳥居」の足元の流れを見てください。

・・・エッ！上の方「北」へ向かって流れていますヨ。・・・

この先旧制静岡高校（後の静岡大学）の敷地跡は「城北公園」。その先の山すそ左手の奥には、家康公が竹千代時代に、今川からの人質生活を送っていた「臨濟寺」。さらにその上バイパスあたりまでは「安東地区」。その上は「麻機（あさはた）（あさばた）」。

東側は「千代田地区」となり、この一帯には広い水田が昭和40年ころまでありました。浅間神社の足元の水流が大きく貢献していたのです。当然その流れは、現在の住宅地のあちらこちらの地下に流れて、東端現在「流通センター」が所在する「巴川」へと流れ込んで清水へと続いているのです。

ふたつ目の話

J R 静岡駅の表口を西に数百メートル進んだ先に「川辺町」(かわのべちょう)という町名があります。

・・・「川の辺り」安倍川の川沿い・中洲がイメージできませんか?・・・

実は、この地域にお城を築くという構想があったともいわれています。当然ですね。中洲ですから大水があれば流失の恐れ大です。そこで現在の浅間神社のある「賤機山」の先端「断崖壁」に築城したといわれています。

また、お城には、その周囲に「お堀」が造られますが、現在「内堀」(うちぼり)と「外堀」(そとぼり)のふたつがありますが、現在の外堀は「中堀」で、さらにその外周に、もうひとつお堀があったとの説もあります。

・・・石垣で築かれた頑強なお堀は、安倍川の流れを導いていたとも考えたいですね。

町なかの城下町の詳細のことは省きますが、**三つ目の話**にします。

1804年(文化元年)に社殿が築かれたお城の正面「浅間神社」の入り口、仲町から西向きに広い道がありますが、ここから西へ少し進みますと、左手に「呉服町」「両替町」右手に「金座町」。さらに西へ進みますと「本通り」。そしてそのすぐ南側に「新通り」。さらにその南側には、「七間町」「駒形通り」と西端の安倍川沿いまで3本の通りが続きます。そしてその西端には「川越町」(かわごしちょう)という、かつては遊郭のあった町になります。この通りは、家康によって築かれた通りといわれています。

そして、安倍川を渡る所が「安倍川もち」のお店のある「安倍川橋」です。

実は、上流の方には「安西橋」がありますが、この橋へは、浅間神社の入り口から西へ向かう「安西通り」があります。かつて、お茶屋さんの町「茶町」を走行する路面電車が通って地域になります。

この「安倍川橋」を渡った先と「安西橋」を渡った先とは、この先で合流するのです。その合流したあたりが「**手越**」(てごし)。その先が20番目の宿場町「**鞠子**」(**丸子**)になるのです。

ここ手越から鞠子の地域は、鎌倉時代、源頼朝が「手越家継」に領地として与え、宿駅を設けたのが始まりともいわれています。

そして「伊勢物語」にも登場する、中世の道「蔦の細道」(つた)・「宇津ノ谷峠」になります。峠を越えれば「岡部」。さらに現在の藤枝「志太」の宿になります。

さらにもうひとつ、四つ目の話です。

J R沿いの「駅南」の地域「駿河区」です。

細かくは省きますが、弥生時代の「登呂遺跡」跡などが発見されたように、水田地帯でした。そして、安倍川の河口の西側の地域が「長田」(おさだ)。その先は山が迫っていますが、南面が「用宗」(もちむね)・・・古くは「持舟」と書かれている。・・・大崩(おおくずれ)の峠を越えて「焼津」(やいづ)。古くは「やきつ」と呼んでいた海岸の道・・・現在の150号線はトンネルで抜けられますが、この大崩(おおくずれ)の道もかなり危険な道で、大雨などにより通行規制もありますが通行可能です。

さらには、小坂(こさか)・・・地元の人(おさか)と呼んでいる地域の山頂には、「朝鮮岩」と呼んでいる大きな岩もあります。

・・・誰がどのようなルートを通行したのでしょうか？・・・

5つ目の話 町の呼称

この他、家康によって築かれたという「駿府」の町は「城下町」ですから、町のところどころに、それぞれの秘話があったことにお気づきですね。

ここで最後に、町なかに今も残る「城下町」として、その珍しい呼称のうちいくつかを抜粋してみます。

お城の西側・・・本通から安西通境界

馬場町(ばばんちょう)・車町(くるままち)・
茶町(ちゃまち)・金座町(きんざまち)・
一番町から六番町・上石町(かみごくちょう)・
屋形町(やかたまち)・大工町(だいくまち)・
大鋸町(おおがまち)・通車町(とおりくるままち)等
(商人の町)

お城の南東側・・・鷹匠町(たかじょうまち)、

台所町(だいどころまち)今は、日吉町に変わった。
伝馬町(てんまちょう)・水落町(みずおちちょう)、
横内町(よこうちちょう)・銭座町(ぜんざまち)、
鋳物師町(とぎものしまち)・・・江尻に移転した。

その他、安倍川の東岸・・・川越町(かわごしちょう)

安倍川の東岸上流堤防沿い・・・田町(たまち)

安倍川の東岸下流から東名IC周辺・・・中島・西島・下島・中原
安倍川の西岸堤防沿い・・・川原・長田・広野町

〇〇新田は、周辺部に数多くある。
柳新田・安倍口新田・遠藤新田等

町の呼称には、なにかそこに歴史や秘話があるように考えます。駿府に限ることなく、それぞれの町で新しい発見をされることを期待します。

その3 富士川 古谿荘 (こけいそう) ・ ・ 現在は「野間別荘」と呼称

この冊子の冒頭、富士川の項で触れた「古谿荘」について末尾になりましたが再度触れてみます。

明治39年(1906年)時の宮内大臣田中光顕(みつあき)伯爵は、富士を仰ぎ伊豆半島を望む、風光明媚・気候温暖なこの地に、大規模な別荘の建築に着手。明治42年(1909年)完成を見ました。

富士川の海岸段丘の土地に、また建築様式は、近代和風建築の代表的な建物として、その価値を高く評価され目を見張るものです。

それは格調高い書院造りの大広間。材料・工法には、数寄屋をふんだんに加味しながら、一方新しい材料や輸入品。一部には、西洋式工法も採用。電気設備は、隣の芝川町の製紙工場から送電されました。

田中光顕伯爵は、大正3年(1914年)から7年(1918年)まで、ここで隠居生活を送りますが、その後、蒲原の宝珠荘(現、青山荘)(せいざんそう)に移り住むこととなります。

・・・青山(せいざん)は、光顕の号・・・

そして古谿荘は、昭和11年(1936年)講談社の社長、野間清治氏へ譲りました。現在は、(財)野間奉公会の所有となり、その維持管理がされており、一般公開はされておりません。

田中光顕・・・天保14年(1843年)土佐(高知)に生まれる。土佐藩を脱藩後、高杉晋作らとともに幕府征長軍と戦う。中岡慎太郎の死後、陸援隊を統率。維新後は、政府に出仕。明治18年(1885年)第一次伊藤内閣で、内閣書記長官となり、明治31年(1898年)宮内次官から大臣。同40年(1907年)には、伯爵。昭和14年(1939年)97歳で没。号、青山(せいざん)

野間清治・・・明治11年(1878年)群馬県桐生に生まれる。東京帝国大学臨時教員養成所を卒業。明治40年(1907年)東京帝国大学法科書記に就任。翌年、雑誌「雄弁」を創刊。同44年(1911年)講談社を創業。以後次々と雑誌を発行。大正14年(1925年)には「キング」が100万部を越える。東京目白の「蕉雨園」は、昭和5年(1930年)田中光顕の邸宅を買い取ったもの。昭和13年(1938年)61歳で没。

その4 清見寺にまつわる話・・・朝鮮通信使・琉球王子の墓

興津清見寺の項でその詳細を記さなかったので、ここでお示しします。

平成29年(2017年)10月末、ユネスコは、江戸時代の外交資料として「朝鮮通信使に関する記録」を日韓共同で「世界記憶遺産」として登録することが発表されました。その詳細は割愛させていただきますが、日本側の登録遺産資料209点のうち、静岡県内いや清見寺には、なんと48点も収蔵されているのです。

ここで、私たちが比較的安易に目にすることのできる「ユネスコ記憶遺産」のいくつかをご紹介します。

そのひとつは、国道から上る石段の「総門」に掲げられている「**東海名區**」
・・・但し、現在掲げてあるものはレプリカですが・・・

ふたつ目は、上の「山門」を入った、正面の仏堂には「**興國**」

みつつ目、鐘突き堂の入り口には、やや小ぶりですが「**瓊瑤世界**」(けいようせかい)の扁額は、いつでも見ることができます。本堂(大方丈)には、「詩稿懸板」として、漢詩をやりとりした詩文やいくつかの扁額も掲示されております。

この他、近隣には、次のようなお寺の山号の扁額が確認されています。

- ・ 薩埵峠を海側(外洞)に下りた「海岸寺」には「**海岸菴**」
- ・ 由比の阿僧(あそう)の「常円寺」には「**法城山**」
- ・ 北街道の梅ヶ谷の「牛欄寺」と「真珠院」の「**鳳凰山**」
- ・ 庵原の吉原の「善原寺」には「**瑠璃界**」
- ・ 三保、駒越の「**萬象寺**」(まんぞうじ) 等々の確認がされています。

注意・・・普段、私たちが安易に目にすることのできる「扁額」は、実はユネスコ記憶遺産として認定されておりません。その原本(紙や布に書かれた物)が正式な遺産として認定されているとのこ

とです。

興津清見寺では、本堂（大方丈）には、慶長12年（1607年）の第1回目の訪問の際、徳川家康が、通信使に清水湊で舟遊びをしてもてなしたことを記録した「懸板」をはじめ、いくつかの扁額が掲示されています。宝物殿には、通常非公開ですが、直筆の「詩稿」も数多く保管されています。

・・・2018年5月より、清見寺が保管する資料全48点が、インターネットで公開。日本語の現代訳もつけられています。・・・

この第1回目について、寛永元年（1624年）の第3回目には、往復とも清見寺での宿泊が確認されていることをはじめ、最終の12回目の文化8年（1811年）は、対馬の行礼となっていますので、4回目の寛永13年（1636年）以降11回目までの間の宿泊は、再興なった「江尻宿」に変わりますが、清見寺へは、都合12回に及ぶ来訪のうち、なんと10回も宿泊したり立寄ったり、あるいは使い人を立ち寄せたりを続けていたことが確認されています。

現在は、総て埋め立てられてしまいましたが、「清見瀉」の景観は、当時より国際的にも知られるところとなっていたのです。雪舟や蕭白などの絵画も数多く残されていますので、その昔の姿を知ることできます。

・・・埋め立てられる前の「清見瀉」の岩礁（岩）の写真は、坐漁荘にアルバムにしてご紹介しています。

清見寺には、西園寺公が、住職古川大航翁に贈った「長吟對白雲」（はくうんに対し長吟味す）の扁額も掲げられています。

そして、過去のいくつかの争いに見られたように、「薩埵峠」は、その征服した者が征圧する力を発揮。その峠を越えるために、古道の「地藏道」の山道に対して、海が穏やかな場合や急を要する場合には、現在のJRの線路沿いの道は「下道」として通行したかもしれませんが、通常は、峠越えの道として、天和2年（1682年）には「上道」が、明暦元年（1655年）には「中道」が、興津の民らにより造成されて、その通行を助けることとなりました。豊臣政権下で、「文禄の役」や「慶長の役」に代表されるような朝鮮半島への侵攻が繰り返されましたが、ここで室町時代以来の朝鮮との深い関係が復活されたのでした。

「朝鮮通信使」のことで言葉遣いに気をつけていただきたいことを一言！

1回目から3回目は、「通信使」と呼ばないで「回答兼刷還使」と呼んでください。都合1,700人余の人質として日本へ連れて来られた朝鮮の人々の帰国を実現したのです。「通信使」・・・誠を交わす・・・という呼称は4回目以降となるのです。

ところが、もうひとつ。この「朝鮮通信使」だけではないのです。

15世紀から16世紀ころ、親善関係にあった琉球政府と島津氏との間は秀吉により、琉球の服属と朝貢を求められました。さらに慶長9年(1604年)オランダが平戸に商館を設置したり、朝鮮と己酉約条を締結した、二代秀忠の時代、薩摩藩島津家久は、3,000の兵を派遣して琉球攻めをして、その支配権を得るところとなったのです。

慶長15年(1610年)薩摩に同行して、江戸へ向かっていた琉球王子の一行は、長い船旅の中、弟「具志頭王子」は病に倒れ、駿河に上陸しましたが、33歳という若さで亡くなってしまいました。(船中で死亡との説もある。)

この王子のお墓を、清見寺の墓地に建立、弔うこととなりました。これが「**琉球王子の墓**」(具志頭王子)(ぐしちゃんおうじ)として現存しているのです。

寛永11年(1634年)から嘉永3年(1850年)およそ200年もの間、琉球の対中国貿易の継続の策略を続ける幕府は、将軍の就任を祝しての使節「慶賀使」は10回。反対に、琉球王の即位したことの挨拶に向かう「謝恩使」は12回往復したと数えられています。この時、興津清見寺前を通過する琉球の使節は、このお墓に必ず立ち寄り墓参をしたといわれています。

寛政2年(1790年)墓石の建替えがされましたが、この時の記録が、扁額『**「永世孝享」朝陽**』として、清見寺の朝鮮通信使の扁額と並んで掲示されています。また、供養の記録として、布製の「**双聯蛟月長輝芳風不断駿河山迂翼**」も残されています。

この他清見寺には、時代は前後しますが「白隠」禅師のことや家康が駿府に人質でいた「竹千代」の時代の住職の教えのこと、雪斎のこと、豊臣秀吉が小田原攻めの時立ち寄ったこと、有名になった「五百羅漢」のこと、「壮士の墓」や高山樗牛の「清見寺の鐘声」の石碑・「月島丸」で遭難した商船学校の学生らの版・西園寺公望公自筆「長吟對白雲」の扁額、高山樗牛の「鐘声」の石碑など観賞することができます。300円の浄財を納めていただきますと、本堂(大方丈)や「玉の座」へ入場・「名勝の庭園」を観賞することもできます。

清見寺の歴史や記録には、まだまだ秘められているものが数多く残されています。改めて調査・研究をいただくことを希望いたします。

その5 桜えび漁の話

駿河湾の特産品、由比の漁協がその拠点となっていることは周知のことと思いますが、実はこの「桜えび」漁は、それほど昔のことではないのです。

今は東名道やバイパスが通行して、全くその面影がなくなりましたが、わずか60年余前までは由比から蒲原～富士川の西側の河口付近の海岸線

では、沿岸の漁業と北側の田畑や山地における農業による半農半漁の暮らしが営まれていました。また、古くからその砂浜では「塩浜」と呼んで「製塩業」を営む家もありました。

そして地元の子供たちは、その海岸線で営まれる親の仕事を当たり前のように手伝い、一方海水浴のシーズンには、日が暮れるまで海に入り、冬のシーズンは、その砂浜はグラウンドとして利用していました。

桜えび漁の始まりは、今から100年程前の明治27年（1894年）のことなのです。

当時いや現在でも、このあたりは、鰯（あじ）の「夜曳網」（よびきあみ）が盛んですが、ある日、望月平七と渡辺忠兵衛のふたりの共同の網の口につけた「浮き樽（カンタ）」がはずれて網が深く沈んでしまったのです。ところが、それを引き上げたところ、それまでにもたまには目にしたことはあったが、美しい小型の海老が入っていたのでした。月のない夜、普段は深海にいる海老が、海面近くに浮上してきたのです。それまでの漁よりは、深度の深い位置のためわずかの海老は見たことがあったのですが、これほど大量の海老がいることには今まで気がつかなかったのです。どの程度の深さまで網を入れれば海老が獲れるのかがわかったので、二人は、何度も何度も網を入れ、たくさんの海老をとることができました。この「大発見」を契機にたちまち「桜えび漁」が普及し名物となり、今では焼津や大井川の沖き合いにまでその漁場は広まりました。

「桜えび」と名づけたのは、誰なのかは判っていません。一説には、甲州の人ではないかとの説もあります。・・・エッ？なんで甲州？

由比の商人が 天秤棒担いで、駿河湾の海産物やエビを、由比の山越えをして、甲斐の山中に運んで売りにいったという歴史が、その昔からあったことを見逃すことはできません。

しかし、乱獲がたたり水揚げが急落。そこで考え出されたのが、参加漁船の水揚げの全てをプールして利益を分かち合うという仕組みを考えたのです。こうすれば、他の船と張り合ったり、むやみに獲ることもなく、逆に自分が不漁であっても共同で漁をするということで収入が安定することとなったのです。

夜曳（よびき）・・・勇壮な出漁風景

毎日夕暮れ近くになると、たくさんの小型の漁船が、由比の漁港から白波をけたてて出発する船団は勇壮な眺めです。漁は、暗くなる頃から始まるので、今夜はどのあたりに海老の群れがいるのか情報を頼りに、船長が、魚群探知機に目を凝らします。操舵室（ラットバ）には、スピーカーから絶え間なく仲間の声が聞こえているのです。

月夜の明るい時は、エビは、深海に留まっているため漁はできません。「ツキサン休み」といって、満月の前後は、漁は休みになるのです。

魚群探知機がエビの群れを見つけると、二艘の船が一組になって、直ちに網を投げ入れます。これを「メオト」（夫婦）ともいいます。

エビの入った網を揚げる辛い仕事は、多くの人手を必要としたので「カイコ」と呼ばれる労働者を雇った船も多かったのですが、今ではネットローラーが使用されるようになって、みるみるうちに網は引揚げられるになりました。二艘が舷側を寄せ合い網が絞られると、アカアカと照らされたライトの下には、鮮やかなピンクのエビが浮び揚がってきます。「桜えび」という言葉そのものの美しさです。網からエビを入れる「魚箱」に入れると、エビに混じっている小魚を選び分ける作業が待っています。2回3回と繰り返されれば大漁です。

朝日の挙がる頃、水揚げされた桜えびは、そのまま生で出荷されたり、業者に買い取られて加工されます。加工には、そのまま乾燥させる方法と茹で上げてから干す方法があります。

面白いことに、関西方面に出荷する干しあがったエビには、鮮やかな桜色に仕上がるように着色しますが、関東地方には着色せず、そのまま出荷します。

・・・干した桜エビが、きれいなピンク色は、関西風。やや色あせた黄色かかった物は、関東風。・・・東西の好みの違いなのでしょう。

釜茹でされた「桜えび」の長い髭は、釜から取り出し乾燥させ、それを粉末にした「えびパウダー」を地元では手に入れることができます。ご飯に炊き込んだり、焼きそばにまぶしたりすると、ほのかな香りが楽しむことができます。

エビの天日干しは、かつては、由比倉沢地区と蒲原地区の砂浜でしたので、東海道線の車窓からそれを楽しむことができました。残念なことに、この景色は東名高速道やバイパスの建設により今は見ることができなくなりました。今は、富士川河口の河川敷。富士山をバックに絨毯を敷き詰めたような景色になります。

一方、桜エビは、生でそのまま食べるのもよし。かきあげの天麩羅も絶品ですが、醤油でさっと煮揚げたものは、夜の漁から上がってきた「漁師飯」の一品です。漁師たちは、船元の家に行き、「オキアガリ」と呼んだこの醤油で煮揚げたエビを肴に一杯やってから帰宅。その日の夕刻に、再び出漁の準備に駆けつけるのです。

漁港や漁法が現在のように整備されるまでは、帰ってきた船を浜に引き揚げ、次ぎの出航までの準備作業は、一家総出の仕事でした。そして、出航を見届けると、夜明け前には「番小屋」の寒さの中で「男衆」の帰りを待っていました。そして船が戻ると、船を浜へ引き揚げ、魚箱に入ったエビの陸揚げ作業。毎日がこの繰り返しでした。報酬は「エビ」です。子供も、大人の半分位は貰

えました。この報酬で手に入れたエビは、おかず用のエビということで「サイエビ」と呼ばれていたが、中にはこれを海老屋に売る人もいたそうです。

こうした夕暮れ時から明け方までの「エビ漁」のことを「**夜曳き**」と呼ばれていたのです。現在では、漁獲の技術も進化しているので、夕暮れ時の出航は変わりませんが、陸に戻ってくるのは、その日のうちの10時11時ころが多くなりました。

生きた桜エビの姿は、3センチメートル程の大きさで、自分の体長の2倍も3倍もある長いひげのある「伊勢えび」などと同じような姿はしていますが、やや透明な生き物です。残念ながらこの生の桜エビの姿を見ることはなかなかできません。生きたまま水槽などへ入れても、1日位で死んでしまうからです。

ここ由比では、この桜エビ以外に「しらす」のことも忘れることができません。都会では味わえない「生しらす」は、地元の魚屋さんの店頭で並ぶようになると「**しらす漁**」が始まったことが一目瞭然です。

この「しらす漁」は、深夜のエビに対して、早朝の漁になります。

「しらす」は、釜で茹で揚げて出荷する「茹でしらす」が普通ですが、保存したい場合には、笹や金網に並べて干すこと「ちりめん干し」や「たたみ干し」といって、板海苔のように仕上げることもあります。

「生しらす」は、すぐに傷んでしまうため冷凍にしても食卓にはのせられません。ですからこの新鮮な「生しらす」を、おろし生姜や醤油・酢味噌などで味わえるのは、漁場近くに住む人たちの特権といえるのではないのでしょうか。

極力、午前中または昼食までには召し上がることをお勧めします。

その6-1 安倍川橋について

静岡市全域は、東には、富士川。西には、安倍川。そして中間には、由比川・興津川・巴川などが今以てそれぞれの「町」を区分し、加えて長い歴史のなかで、戦いが繰り広げられた「薩埵山」「薩埵峠」。そして駿府（静岡）と岡部・志太（藤枝）の堺には、これまた歴史のある「宇津谷峠」が、現在も「町」を区分しており、この地域を「**二峠六宿**」の町と総称して、多くの旅人をお迎えしております。

最後に「**安倍川橋**」について、少しですが触れてみます。

文中でも触れましたが、静岡市の中心部「駿府城」「浅間神社」から、西へ向かう「本通り」を西進すると、「安倍川もち」のお店が橋のたもとにあります。

この橋を「安倍川橋」と呼んでいるのですが、全長およそ500m、現在は「トラス橋」といって、橋の両側から弓なりの鉄骨で、いくつもの橋桁がつけられています。その歴史の一端を書き出してみました。

江戸時代。街道筋の大きな川に橋を架けることが禁じられており、旅人は「川越え人夫」に渡してもらっていたことは、全国のあちらこちらでも有名な話ですが、明治4年（1871年）仮橋や渡船で川を渡ることが許され、地元の実業家「宮崎総五」さんが、私財を投じて、明治6年（1873年）9月着手。明治7年（1874年）木製の「安永橋」完成したのが始まりといわれています。

その後、明治36年（1903年）初代の橋より40mほど上流に、現在の「安倍川橋」の工事に着手。大正12年（1923年）完成。「安倍川橋」と命名されたそうです。

その6-2 宇津ノ谷峠について

静岡市（駿河の国）府中・江尻は、その昔から、富士山の眺望・駿河湾・伊豆の連山・三保の松原・大崩など、多くの人々の目を楽しませてくれた書き物が残されています。一方、古くは、由比や庵原に見られる「古墳時代」や「登呂遺跡」に見られる「弥生時代」の遺跡や埋蔵物。

そして、今川家・武田家の勢力による時代から徳川の時代の交通の要所だったことを知ることできます。

最後、現静岡市の西端「丸子宿」（まりこ）と西隣り、現藤枝市「岡部宿」（おかべ）に挟まれた「間の宿」（あいのしゅく）「宇津ノ谷」（うつのや）についてふれて締めくくりたいと思います。

「宇津ノ谷」の起源は、奈良時代とも平安時代ともいわれています。

在原業平（ありはらのなりひら）が「伊勢物語」で

『するがなる 宇津の山べの うつつにも 夢にも人に あはぬなりけり』

と詠んだ。この句から地名が生まれたともいわれています。

「**葛の細道**」（つたのほそみち）・・・約4km・・・は、すっかり整備され散策路として、多くのハイカーを迎えております。

一方、旧東海道の街道「**間の宿、宇津ノ谷宿**」は、山越えの交通の難所として知られていましたが、明治になって、その交通を円滑にするために、街道筋から多少反らして、明治7年（1874年）5月着手。明治9年（1876年）6月隧道（ずいどう）トンネルが完成しました。しかし明治29年（1896年）火災に見舞われ崩壊。明治36年（1903年）より、現在も残る「レンガ積み」のトンネルに改修。明治37年（1904年）に完成しました。これ

を「明治トンネル」（高さ4 m前後）と称しているのです。

その後、さらに通行量の増加、人や馬から自動車へと進化し、通行に不便が生じ、新たな路線「大正トンネル」が完成。・・・明治トンネルから10分程離れ、高さは7 m余・・・。

さらに、現在のR1上り線のトンネル「昭和トンネル」（高さ9 m）が完成。平成10年（1998年）には、R1下り線の「平成トンネル」（高さ11 m余）が完成したのです。

「明治トンネル」は、文化財としての価値もさることながら、時代を超えた土木技術を見ることができます。

一方「宇津ノ谷」地区は、旧東海道の面影を残す「家並み」「旅籠」等が残されており「道のミュージアム」としても知られています。

< 構造 >

アーチ構造、レンガ造り

明治・大正トンネルは、いずれも徒歩数分で通り抜けができます。トンネル内は、昔ながらの照明はありますが、懐中電灯で新しい発見をするのも楽しみです。全コース、トータルで約1.5 km。3時間前後。

靴は、歩きやすい靴を着用。トンネル内では、冬は、防寒着必須。

峠の東・西両方の登り口附近には「道の駅」があります。

< 交通 >

マイカーは、トンネルの東（静岡側）・西（藤枝側）いずれも「道の駅、宇津ノ谷峠」周辺に若干ありますが、基本はバス利用をお勧めします。

静岡方面からは、静鉄バス「中部国道線」藤枝駅行きに乗車「宇津ノ谷入口」・・・峠の東（静岡側）登り口で下車。

一方、藤枝方面からは、同じく静鉄「中部国道線」新静岡行きに乗車「坂下」・・・峠の西（藤枝側）登り口で下車。

「蔦の細道」も、同じ交通機関・停留所をご利用ください。

まとめに替えて

コースをあらこちらと寄り道をしながらも、以上、徒然なるままに散策・探検コースを、文章により表現してみましたがいかがでしたでしょうか？

「まえがき」でも触れましたが、広域を1冊にまとめようとして既存のコースや主だった史跡・施設のご紹介が主になってしまいました。できれば地図を脇に置いて、この文章に目を通していただくこと。さらには、それぞれについて、現地に足を運んでいただき、現地のガイドから直接お話を聞いていただくことを希望いたします。加えて、この書をきっかけに、その他の資料などから、

より深い歴史をご理解いただくための一助となれば幸いです。

また、この後のページを利用して、一部重複するところもありますが、文中で書き漏らした、それぞれの町や途中で立ち寄れる施設や見学先には、その名前と簡単なコメント・電話番号。末尾には、地域毎のガイドのお仲間の連絡先など、もちろん全てではありませんが書き出してみました。ご参考にしていただければ幸いです。

なお、お仲間やご家族と連れ立ってお訪ねいただく場合には、是非、それぞれの施設などお立ち寄り先へは、事前にご連絡ご相談いただき、プランを立案していただくことを願うところです。加えて、現地でのガイドをご要望される場合には、その対応におこたえできるよう、SVGのガイドや各々の施設のガイドが務めさせていただきます。併せてお申し出お願いいたします。10人を超えるようなグループでお越しになる場合は、その重複をされるためにも事前にご相談ご連絡をしていただくようお願いいたします。

拙い文に長々とお付き合いいただきありがとうございました。

追記1

この冊子の記載内容については、今後、より一層内容の充実を計り、改訂版発行を予定しております。記載内容の不備、可否等など忌憚なくご教示いただきますようお願い申し上げます。

また、一層の調査・研究のために、その詳細のお問合せにも、ご回答させていただきますよう準備をしております。お申し出お願い申し上げます。

追記2

今回掲載した施設や立ち寄り先の所在地・電話番号は、2018年末現在です。変更などもあるかもしれません。ご容赦ください。

見学先・立ち寄り処等の抜粋

<富士川>

見学先

小休本陣 常盤邸

1854年（安政元年）の地震の後に再建されて現存している名主の邸宅跡
岩淵一里塚

江戸から数えて37番目の一里塚。

塚の西側の榎は、樹齢400年ともいわれている。

富士川町づくりセンター

かなり古い農家「稲葉家」の建物を移築。「整形の間取り」

土・日・祝日は、建物内の見学ができます。

商工会富士川事業所に その事務所を置いております。

富士川の松並木

富士川の鉄橋の下流側の堤防、200mほど

お土産屋さん

松風堂

JR富士川駅から数十m東にある「小まんぢゅう」

1口サイズ。昼には売り切れてしまうほどの素朴な甘さ

<蒲原宿>

木屋江戸資料館渡邊家 文中にて既説明

蒲原2丁目2-20

要事前問い合わせ、

TEL/FAX：054-385-3441

本陣跡

江戸中期までは2軒の本陣があったが、東本陣は、宝暦年間に途絶えた
が、西本陣は、江戸末期まで務め、その後京都へ転居した。ここの建物
と塗り壁造は、大正時代のものといわれている。

旅籠、和泉屋

天保年間に建てられ、安政の地震にも倒壊を免れた旅籠。
2階の楕形の手すりや看板掛け・腕木などの面影が残る。
甘味のお休み処と鈴木家と2軒に分かれている。

営業時間 9：30～16：30

休館 月・祝日の翌日・年末年始

県埋蔵文化財センター

旧庵原高校跡 富士川の河口西岸

休館日注意

旧五十嵐歯科医院

大正時代の町屋を洋風に改築した、県近代遺産の建物。
外観は洋風、内観は和風、
大正3年（1914年）五十嵐準は、2階に歯科医院を開業。
現在はいろいろな企画展や催し物を実施

開館時間 9：30～16：30

休館 月・祝日の翌日・年末年始

増田家

江戸時代の格子戸の面影
外観の観賞

志田邸

国の登録有形文化財 屋号「やまろく」
江戸時代、米・塩を商い、後に、醤油の醸造業
安政の地震後、建替えられた。土間の戸口、蔀戸（しとみ）などが残る。
東海道町民生活歴史館を併設。

開館日 不定期 要事前確認

磯部家

明治の建物
外観の観賞

このほか、数多くの国の登録有形文化財・近代化遺産が町筋に見られる。

<由比1>・・・由比宿周辺

*** 見学先 ***

正雪紺屋

慶安の変の首謀者「由比正雪」の生家といわれている。
何代も続く老舗の紺屋、お土産に染物もある。
建物は、蔀戸（しとみ、と）や江戸時代の藍瓶・用心籠などが残されている。

脇本陣

徳田屋・羽根ノ屋・温飴屋（うんどんや）
この3軒は 順番に脇本陣を務めた。

由比本陣公園

由比町由比397

東海道広重美術館

定期的に企画展を開催 有料

TEL：054-375-4454

由比宿交流館 休憩所

無料

TEL：054-375-5166

本光寺 古墳群・・・既説明 P13参照

神沢川酒造場

大正元年創業

直販・見学 要 事前予約

誉富士・正雪の醸造元

TEL：054-375-2033

*** 薩埵峠 ***・・・由比側

くらさわ屋

東倉沢 鯨の食事

要予約 TEL：054-375-2454

間の宿 脇本陣 柏屋

西倉沢

名産「由比ビワ」の発祥の話

望嶽亭 藤屋

西倉沢

現在は 個人宅のため開館は不定期。

事前に054-375-3486（昼間のみ）へ連絡をしてください。
400年余の歴史があるすばらしい眺望から、「望嶽亭」の名をもらう。

* 1868年（慶応4年）西郷隆盛との話し合いのために府中に向かっていた幕臣 山岡鉄舟が、官軍に追われて助けを求め、主の計らいで舟に乗り、江尻の湊へ向かった。

*** 薩埵峠 * . . . 興津側**

駒の爪跡

今は舗装されて 確認が困難。

薩埵地蔵

薩埵山の頂上 口伝 所在確認不可

東勝院

真言宗 薩埵地蔵の庇護を続けているお寺

< 小 島 >

龍津寺 . . . 既説明 臨済宗妙心寺派

小島 栗原

TEL : 054-393-3028

小島陣屋址

小島本町 既説明

グループで見学希望の場合は 文化財を守る会

小島モータース 渡辺唯義

TEL : 054-393-2012

FAX : 054-393-3909

< 興 津 >

52号線身延路～東名高速道より北（上部）にあるお寺と宗派を列挙

興津川 上流の西岸

少室山	見性寺	八木間	曹洞宗	
熊耳山	西来寺	八木間	曹洞宗	(せいらいじ)
妙常山	淨蓮寺	八木間	日蓮宗	
妙喜山	法泉寺	八木間	日蓮宗	
鶴雄山	少林寺	八木間	曹洞宗	
法縁山	蓮性寺	谷津	日蓮宗	

興津川 上流の東岸

薩埵山	東勝院	井上	真言宗
円悟山	霊泉寺	井上	臨済宗妙心寺派
神護山	承元寺	承元寺	臨済宗妙心寺派

興津川 下流の東岸・・・洞

観音山	海岸寺	興津東町	曹洞宗
龍光山	瑞泉寺	興津東町	日蓮宗

興津宿（東海道沿線にあるお寺と宗派）**興津駅 周辺**

龍河山	宗徳院	興津本町	曹洞宗	古御館	ふるおやかた
瑠璃山	龍興寺	興津中町	曹洞宗		
祥瑞山	理源寺	興津中町	日蓮宗		
教敬山	耀海寺	興津本町	日蓮宗		

国道沿い

巖腰山	瑞雲院	清見寺	臨済宗妙心寺派
巨鼈山	清見寺	清見寺	臨済宗妙心寺派

*** 見学立ち寄り先 ***

一碧楼水口屋ギャラリー 西脇本陣跡 (フェルケール博物館別館)

無料

グループでの入場・ガイド対応は 事前に申し込む

TEL: 054-369-6101

開館時間 10:00~16:00

休館日 月曜日

清見寺

山門前の庭園・五百羅漢などは無料

本殿・方丈の間・竹千代手習いの間は 浄財として¥300

山門を入らずに 裏山の墓地の最上部には琉球具志頭王子の墓がある。

徒歩数分

グループでの入場・ガイド対応は 事前に申し込む

TEL: 054-369-0028

仏事のある時は 一定の制約ご容赦ください。

坐漁荘（復元）

西園寺公望公の別荘

無料

10名以上のグループでの入場・ガイド対応は 事前に申し込む

TEL:FAX:054-369-2221

休館日 月曜日

ガイド対応時間

平日 10:00～16:00

土・日・祝日 9:30～16:30

西園寺公のことに限ることなく かつての興津の町のこと当時の写真なども用意してあります。どのようなことのガイドをお望みかお申し出いただければ対応いたします。

< 横砂・袖師 >

市埋蔵文化財センター

無料

かつての井上馨侯の別荘「長者荘跡」

グループでの入場・ガイド希望は 事前に申し込む

TEL:054-367-9436

休館日 土・日・祝日 但し第1と3の日曜は開館

廬崎神社

無料

横砂

秋葉寺・秋葉神社

通称 秋葉山（あきわさん）

無料

辻

< JR清水駅・港橋周辺 >

次郎長生家

美濃輪町

休館日 火曜日

無料

TEL:054-353-5000

末 廣

港町1丁目

次郎長の船宿の復元と資料館

無料

月曜 休館

フェルケール博物館・・・港湾博物館 駐車場有り

港町2丁目

ガイドあり 有料

月曜 休館

波止場

湾内クルーズ（水上バス・羽衣ライン）

1周45分 ￥1000 要予約

ミニ・クルーズ 三保真崎まで

￥400 20分 自転車の乗船 可

TEL：054-353-2222

* 待合場の奥乗船場の後に次郎長が築いた石積みの跡 *

この冊子に掲載したうちのいくつかのお寺を抜粋

市中山 江浄寺

江尻東3丁目6-6

TEL：054-366-5563

家康の第一子 岡崎三郎信康の遺髪のお寺

補陀落（ふだらく）山 鉄舟禅寺

村松2188

TEL：054-334-1203

国宝 久能寺経 他 いくつかの国宝

山岡鉄舟の墓

有料 ￥300

観富山 龍華寺

村松2958

TEL：054-334-2858

地元では（りゅうげんじ）と呼ぶ人もいます。

富士山がきれいに見えることから「観富山」の山号

高山樗牛の菩提寺 日蓮宗

樹齢1100年といわれているウチワサボテン（大宝剣）

高源寺

高橋2丁目7-4

TEL：054-366-2410

通称「北街道」 新幹線のガードの近く

鎌倉時代の初期 義経の侍大将 梶原平三景時の供養塔

江戸時代の「櫓」(やぐら) 時計

本堂は 明治5年 現在の鉄舟寺の前身 久能寺より買い取って建て
られた有形文化財

本堂への立ち入りは事前に申し込むこと。

但し 仏事のある時は制約があります。

梅蔭禅寺

南岡町3-8

TEL：054-352-0995

次郎長の菩提寺

資料館(有料) 駐車場あり

< 地域別ガイドの会と各々の責任者連絡先 >

フェルケール博物館 友の会ガイド部会	平井 隆 而
	フェルケール博物館 気付
	TEL: 054-352-8060
	FAX: 054-352-9095
清水の歴史かたるべ会	久保田 禎 昭
	TEL: 090-1863-6510
	FAX: 054-346-8110 自宅
清水郷土史研究会	和 田 勇 三
	TEL: 090-5851-5426
	毎週火・金曜 午前10時から12時まで開局
清水ふるさとガイド研究会	久保田 裕 夫
	TEL/FAX: 054-366-0992 自宅
次郎長翁を知る会	山 田 捷 司
	(公財)するが企画観光局清水事業所 気付
	TEL: 054-388-9181
	FAX: 054-388-9182
興津坐漁荘・坐漁荘研究会	渡 辺 俊 治
	興津坐漁荘 気付
	TEL/FAX: 054-369-2221
NPO法人 おきつ	飯 田 英 夫
	TEL/FAX: 054-369-0572 自宅
いほはらの郷 みち案内	立 川 岸 夫
	TEL/FAX: 054-366-0992 自宅
由比ボランティアガイド連絡会	古 牧 資 晟
	TEL/FAX: 054-375-5355 自宅
蒲 原	内 藤 達 男
	TEL/FAX: 054-385-2504 自宅
三 保	北 村 昭 夫
	TEL: 090-2268-8950 自宅
	zvt10016@nifty.com
ぶんかさろん しみず	山 本 量 正
	清水区港町2-1-1 キララシティ2F 気付
	TEL/FAX: 054-353-2801

友誼団体・諸施設など・・・団体訪問・見学には 事前連絡を

- | | |
|--------------------------------|---|
| 富士川観光ガイド協会
富士市岩渕6-3 | 代表者 齊 藤 隆 久
富士市商工会富士川事業所 気付
TEL: 0545-81-1280 |
| 小島 文化財を守る会
小島モータース 気付 | 代表 渡 辺 唯 義
TEL: 054-393-2012 |
| 脇本陣 一碧楼 水口屋ギャラリー
清水区興津本町36 | 月曜休館・無料
TEL: 054-369-6101
(フェルケール博物館 別館) |
| 末 廣 次郎長の船宿(復元)
清水区港町1丁目2-14 | TEL: 054-351-6070
月曜休館・無料 |
| 旧五十嵐邸歯科医院 有形文化財
清水区蒲原3丁目 | TEL: 054-385-2023
月曜休館・無料 |
| 旅籠・お休み処 「和泉屋」
清水区蒲原3丁目 | TEL: 054-385-7111
月曜休館 |
| 木屋 江戸資料館 渡邊家
清水区蒲原3丁目 | TEL/FAX: 054-385-3441 |
| 富士川 小休本陣 常盤邸
富士市岩淵455番地 | TEL: 0545-81-0135
土・日・祝日のみ開館 平日は富士市立博物館へ事前連絡
0545-21-3380 |
| 梅蔭禅寺(次郎長の菩提寺)
清水区南岡町3-8 | TEL: 054-352-0995 |

由比 本陣公園

清水区由比町由比 2 9 7

- ・ 由比宿交流館 TEL: 0 5 4-3 7 5-5 1 6 6 無料
- ・ 東海道広重美術館 TEL: 0 5 4-3 7 5-4 4 5 4 4 1 0 円

静岡市埋蔵文化財センター(旧 井上馨別荘 跡)

清水区横砂東町 3 3-2 TEL/FAX: 0 5 4-3 6 7-9 4 3 6

土・日・祝日休館
但し 第1・第3日曜は開館

巨鼈山 清見寺 (清見ヶ関・具志頭王子の墓・五百羅漢 他)

清水区興津清見寺町 4 1 8 TEL: 0 5 4-3 6 9-0 0 2 8

敷地内入場無料(本堂への入場は300円)

興津坐漁荘 (西園寺公望公別荘 復元家屋)

清水区興津清見寺町 1 1 5 TEL/FAX: 0 5 4-3 6 9-2 2 2 1

無料・月曜休館(甘味処営業)

静岡県埋蔵文化財センター

清水区蒲原 5 3 0 0-5 バイパス富士川河口西口 旧庵原高校跡

TEL: 0 5 4-3 8 5-5 5 0 0

FAX: 0 5 4-3 8 5-5 5 0 6

フェルケール博物館

清水区港町 2 丁目 8-1 1 TEL: 0 5 4-3 5 2-8 0 6 0

月曜休館 大人 4 0 0 円 駐車場あり

次郎長生家 (復元)

清水区美濃輪町 4-1 6 TEL: 0 5 4-3 5 3-5 0 0 0

火曜休館・無料 駐車場 5 台

< お断り >

本誌に記載されている施設や立ち寄り先の所在地・電話番号は 2018 年末現在のものです。 変更等があるかもしれません。 ご容赦いただくとともに、事前にご確認いただきたいと希望します。

発行 清水区観光ボランティアガイドの会
(略称 SVG)

事務所 〒424-0943
静岡市清水区港町2丁目1-1
キララシティ2階
清水市民活動センター 気付

電話・FAX 054-351-0211
携帯電話 080-1586-6456
Eメール svg20160912@yahoo.co.jp